

まえがき

日本心理学会は、学術誌として“心理学研究”と“*Japanese Psychological Research*”の2種類を発行しているが、本書はそれらの雑誌に論文を投稿しようとする人たちへの手びきとして作られた。

本書の内容は、両誌の各投稿規定に沿って論文を執筆する際、原稿作成に必要な技術的諸事項、原稿の提出要領、基本的心構えなどを解説するものである。

本書の構成は次のようになっている。

“はじめに”では、執筆・投稿の概要について述べる。それらの詳細については、個々に対応する項目番号およびページが示されているので、それらを参照されたい。“第1章”では、原稿の具体的な作成方法について各項目ごとに解説する。原則として、各項目に関連する見本や使用例は、各項目の解説の近くに示されている。“第2章”では、論文投稿から掲載までの一連の流れを解説する。“第3章”では、初心者の方が論文を書くにあたっての心構えや注意点について述べる。

巻末には、付録として“単位記号”、“校正記号とその意味”、“投稿のためのチェックリスト”および“倫理チェックリスト”を載せてあるので参照されたい。

目 次

まえがき	1
はじめに ——執筆・投稿の概要——	6
“心理学研究”と“ <i>Japanese Psychological Research</i> ”の沿革	10
第1章 原稿の作り方	11
1.1 投稿雑誌の種類と書式	11
1.1.1 “心理学研究”の原稿	11
(1) 原著・資料論文	11
(2) 展望論文	11
(3) 英文アブストラクト・キーワード	11
(4) 論文の長さや形式	11
見本1.1 英文アブストラクトとキーワード	12
1.1.2 “ <i>Japanese Psychological Research</i> ”の原稿	13
(1) Original ArticleとShort Report	13
(2) アブストラクト・キーワード	13
(3) 論文の長さや形式	13
1.2 表題のページ	13
1.2.1 表題	13
1.2.2 所属機関名	13
見本1.2 “心理学研究”本文見本	14
見本1.3 “ <i>Japanese Psychological Research</i> ”本文見本	15
1.2.3 著者名	16
1.2.4 表題ページの脚注	16
1.3 本文	17
1.3.1 見出し	17
(1) “心理学研究”	17
(2) “ <i>Japanese Psychological Research</i> ”	17
1.3.2 段落・見出し以外の序列	17
1.3.3 本文中の脚注	17
見本1.4 見出し見本（心理学研究）	18
見本1.5 見出し見本（ <i>Japanese Psychological Research</i> ）	19

1.3.4	句読法	20
(1)	“心理学研究”における句読法	20
(2)	“ <i>Japanese Psychological Research</i> ”の句読法	20
1.3.5	欧語・欧字	21
1.3.6	片仮名・略語	21
1.3.7	特殊文字	21
1.4	数字・数式	22
1.4.1	数字	22
1.4.2	数式	22
1.5	単位	22
1.5.1	国際単位系 (SI)	22
1.5.2	単位を表わす接頭語	22
1.5.3	文字単位記号の使用	23
1.5.4	SIに適しない例	24
1.5.5	統計記号と式, その他	24
1.6	引用・言及	24
1.6.1	文献の引用	24
(1)	著者名・出版年	24
(2)	自著の引用	24
(3)	共著	25
(4)	著者が3人以上の場合	25
(5)	翻訳書の引用	25
(6)	文献引用の順序	26
(7)	特定のページの引用	26
(8)	電子媒体からの引用	26
1.6.2	文章の引用	26
1.6.3	表・図の引用	26
1.6.4	人名・機関名への言及	27
1.7	表	27
1.7.1	表の原稿	27
(1)	表の用紙	27
(2)	表の大きさ	27
1.7.2	表作成上の一般的注意	27
	見本1.6 表の見本	28
1.7.3	表の題および説明文	29
1.7.4	表中の見出し, 表の注	29
(1)	表中の見出し	29

(2) 表の注	29
(3) 表における統計学上の符号の表記	29
1.8 図	29
1.8.1 図の原稿	29
(1) 用紙	29
(2) 図の種類	29
(3) 図の大きさ	30
1.8.2 図作成上の一般的注意	30
(1) 作図	30
(2) 線と点	30
(3) 図中の文字	30
(4) 図の番号, 図の題	30
見本1.7 図の描き方 (悪い図の例)	31
“作図の際の留意事項”	31
見本1.8 図の描き方 (良い図の例)	32
(5) 写真	33
1.9 引用文献	33
1.9.1 文献を引用する場合の一般的注意	33
見本1.9 引用文献例	34
1.9.2 “心理学研究”中の“引用文献”と“ <i>Japanese Psychological Research</i> ”中の, “References”における欧語文献の書き方	35
(1) 著者名・刊行年次	35
(2) 書籍	35
(3) 逐次刊行物 (雑誌, 年報, 紀要など)	36
(4) 未公刊資料	37
1.9.3 “心理学研究”中の日本語文献の表記の仕方	37
(1) 著者名	37
(2) 書籍	37
(3) 逐次刊行物 (雑誌, 年報, 紀要など)	38
(4) インターネット上の資料, 雑誌, 新聞の引用	39
(5) 未公刊資料	39
(6) 間接引用	40
(7) 雑誌記載法	40
(8) 引用文献に記載する日本語文献の英文表記	40
1.9.4 “ <i>Japanese Psychological Research</i> ”中の日本語文献の表記の仕方	40
1.9.5 引用文献の記載順序	41
1.10 英文アブストラクトとキーワード	41

1.10.1	英文アブストラクト	41
1.10.2	キーワード	42
	“キーワードの選定”	43
第2章	論文投稿から掲載まで	44
2.1	投稿資格	44
2.2	投稿原稿の部数	44
2.3	添付票	44
	見本2.1 心理学研究添付票	45
	見本2.2 Japanese Psychological Research 添付票	46
2.4	投稿者のためのチェックリスト	47
2.5	倫理チェックリスト	47
2.6	投稿論文の受稿	47
2.7	審査の手続きと期間	47
2.7.1	審査の手続き	47
2.7.2	審査の期間	48
2.7.3	論文の改稿	48
2.7.4	改稿原稿の審査	48
2.8	二重投稿の禁止と論文の著作権	48
2.9	論文の掲載	48
2.10	印刷, 校正と別刷	49
2.11	必要経費	49
	“論文の受稿と受理”	49
	見本2.3 投稿から出版に至るまでの流れ	50
第3章	論文を書くにあたって (初心者の方へ)	51
3.1	論文の文章と用語	51
3.2	論文の構成	52
付録1	単位記号	54
付録2	校正の記号とその意味	59
付録3	投稿のためのチェックリスト	60
付録4	倫理チェックリスト	61
	あとがき	62

はじめに —— 執筆・投稿の概要 ——

“心理学研究”と“*Japanese Psychological Research*”への投稿に当たっては、最初に以下の概要を参照されたい。但し、ここに示すものはあくまでも概要であるので、実際の執筆・投稿に当たっては、第1章以下を熟読することが必要である。

1. 社団法人日本心理学会が発行する学術誌は“心理学研究”と“*Japanese Psychological Research*”の2種類である。“心理学研究”は1年1巻とし6号に分けて発行され、“*Japanese Psychological Research*”は同じく1年1巻とし4号に分けて発行される。これらの学術誌の編集は、機関誌等編集委員会（以下編集委員会とする）の責任のもとに行なわれる。

2. “心理学研究”には原著、資料、展望、会報の欄を設け、“*Japanese Psychological Research*”には Original Articles, Short Reports と News and Notes の欄を設ける。

3. 学術誌は、原則として本会会員の心理学に関する未公刊の論文の発表にあてる。ただし、非会員からの投稿論文でも、本学会に寄与するものは掲載が認められる。その場合、掲載料は執筆者の負担とする。

4. 投稿論文は、編集委員会によって審査され、その掲載の可否が決定される。

5. 論文の作成にあたっては、社団法人日本心理学会会員倫理綱領および行動規範（2003）の趣旨を踏まえること。

6. 投稿論文の形式と種類

投稿論文の原稿は、この“執筆・投稿の手びき”に準拠したものに限られる。

“心理学研究”の投稿原稿は、文字の大きさを10ないし10.5ポイント以上とし、A4判の白紙に鮮明に印字する。“心理学研究”の原稿は、1枚あたりの字数を800字（25字×32行）とし、余白（上下、左右3cm以上）と行間を十分にとる（見本1.2, p.14）。

“*Japanese Psychological Research*”の投稿原稿は、一般的フォントおよびサイズ（見やすいもの）を使用し、行間はダブルスペースとする。1ページに入る行数はフォント、サイズにより異なるが、20－23行を目安とし、余白（上下、左右3cm以上）を十分にとる（見本1.3, p.15）。

(1) “心理学研究の原著”

“心理学研究”の原著は、問題提起、研究成果、理論的考察、明確な結論をそなえた論文で、本文、図、表、引用文献、英文アブストラクト、キーワードなどを含めて、800字を1枚として24枚（約19,200字、刷り上がり8ページ）を限度とする（表、図のページ数換算は、第1章のp.27およびp.30を参照）。

(2) “心理学研究”の資料

“心理学研究”の資料は、既成の研究成果に対する追加、吟味、新事実の発見、興味あ

る観察，少数の事例報告，または装置や方法に関する小論文で，本文，図，表，引用文献，英文アブストラクト，キーワードなどを含めて，800字を1枚として18枚（約14 400字，刷り上がり6ページ）を限度とする。

(3) “心理学研究”の展望

“心理学研究”の展望は，心理学の最近の重要テーマについて，内外の研究状況，その主要成果，問題点等を解説することを目的とする。取り上げるテーマと執筆者は，編集委員会で検討し，依頼する。800字を1枚として48枚（約38 400字，刷り上がり16ページ）を限度とする。

(4) “*Japanese Psychological Research*”のOriginal Article

“*Japanese Psychological Research*”のOriginal Articleは“心理学研究”の原著に相当し，本文，図，表，引用文献，英文アブストラクト，キーワード等を含めて，約8 400語（刷り上がり12ページ）を限度とする。本文は英語による。

(5) “*Japanese Psychological Research*”のShort Report

“*Japanese Psychological Research*”のShort Reportは“心理学研究”の資料に相当し，約4 200語（刷り上がり6ページ）を限度とする。その他はOriginal Articleに従う。

7. 論文の作成

- (1) 論文は，基本的には，問題，方法，結果，考察，結論，引用文献を含むものとする。
- (2) 文章は，明確簡潔にする。日本語は常用漢字，現代かなづかいを用いる。英文は専門家の責任ある校閲を経たものとする。
- (3) 見出しは，中央大見出し，横大見出し，横小見出しの3種類とする（見本1.4 p.18および見本1.5, p.19）。
- (4) 句読点は，日本語は句読点コンマ（,）マル（。），欧文は，コンマ（,）とピリオド（.）を使用する。
- (5) カタカナは，動植物の和名，日本語化した外国語を表すとき使用する。
- (6) “心理学研究”では，欧語は外国人名，術語，本の題名，テスト名にのみ用いる。
- (7) 数字には，特別の場合を除き，算用数字を用いる（1.4.1, p.22）。
- (8) 数式には，通し番号を打つ（1.4.2, p.22）。
- (9) 略語は，一般に用いられているものに限る。特に必要な場合は，初出の時に原語と日本語の訳語を示す（1.3.6, p.21）。
- (10) 度量衡の単位には，国際単位系（SI）を用いる（1.5.1, p.22および付録1, p.54参照）。
- (11) 本文中での文献の引用は，著者名と刊行年次を括弧に入れて示す（1.6, p.24）。
- (12) 引用文献の記載は，著者名のアルファベット順とし，文献番号はつけない。各文献は，著者名，刊行年次，表題の順とする。単行本の場合には，表題の後に版数，出版社名（外国の場合は出版地も記す）を記し，雑誌論文の場合には，表題の後に雑誌名，巻数，ページを記す。雑誌名は省略せずに書く（1.9, p.33および見本1.9, p.34）。
- (13) 脚注は，通し番号をつけ，本文中には，それに対応する番号を文章の切れ目の右肩に記す（1.2.4, p.16および1.3.3, p.17）。

- (14) 表と図は、必要最小限度にとどめ、重複をさける。
- (15) 表は、一つずつ別紙に記し、上部に Table 1, Table 2 のように番号をつける。その次の行に、表の題または説明を書く。日本語論文においても、特別の場合を除き表の題、説明文、表中の文字に英語を用いる。表の幅は、刷り上がりページの半幅または全幅に収まるように工夫する (1.7, p.27 および見本 1.6, p.28)。
- (16) 図は、一つずつ別紙に描き、各原図の下の余白部分に図の番号および論文の表題を記す。刷り上がりページが半幅または全幅に収まるよう、縦横ともその約2倍に描く。縮尺率を考慮して、線は太めに書く。図の番号は Figure 1 のように示す (1.8, p.29 および見本 1.7, p.31・見本 1.8, p.32)。なお、これとは別に全ての図の番号及び題、説明を別紙にまとめて添付する。
- (17) 表と図の挿入希望箇所は、本文の右横の余白に指定しておく。本文中で表と図に言及するときには、Table 1, Figure 1 のように記す。表・図のスペースも原稿枚数に換算して、全体の制限ページを超えないようにする。
- (18) 写真は、図と同様に扱われる。

(19) 文章の細部については、表現上の訂正、加筆が編集委員会によってなされる場合もある。

8. 論文を投稿するに当たっては以下の書類を提出する。

- (1) 投稿論文には、必ず所定の事項を記入した添付票を1部つける (見本 2.1, p.45 および見本 2.2, p.46)。
- (2) 原著、資料、展望、Original Article、Short Report のいずれの場合も、本文、引用文献、脚注、表、図、図の説明、英文アブストラクト、キーワード、同日本語訳はすべて鮮明なものを4部提出する。
- (3) 表題、著者名、所属機関名の英訳、100—175語の英文アブストラクト、その日本語訳、英語のキーワード3—5項目をそえる。
- (4) 表題のページには、表題、著者名、所属機関名とそれらの英訳、ならびに連絡先の英訳を記す (1.2, p.13)。
- (5) 論文審査の際に著者名、所属名を伏せて審査するため、提出原稿のうち2部は表題ページに表題 (およびその英訳) のみとする。他の部分の記述でも著者名がわからないよう注意する。
- (6) 倫理チェックリスト (付録4 p.61) の内容を確認の上、記入し原稿とともに送付する。
(内容はホームページからダウンロードができる)

9. 受稿原稿は、隔月に開催される編集委員会で定めた審査者2名によって審査される。審査の結果、編集委員会によって投稿論文の訂正加筆が要求されることが一般的である。著しく改稿が遅れた (半年以上) 場合には、別の論文として、新しく受稿手続きから始める (2.6, p.47)。なお、投稿論文の送付の際には論文の種類 (原著、資料、展望、Original、Short) を、改稿論文の送付の際には、論文の種類と“論文番号”を必ず封筒に明記する。

10. 審査終了後の手続き

- (1) 審査を通過し、編集委員会の承認を受け掲載が決定した場合、編集部から著者宛にその旨

が連絡される。その後、著者はできるだけ速やかに最終原稿を電子媒体（編集部指定する形式）で、印字した原稿とともに提出する。その際、提出原稿の訂正加筆は原則としてできない。

- (2) 校正は、初校のみ著者が行い、再校以降は編集部が行う。
 - (3) 原稿印刷の際、図・表などに関して特に費用を要するものは著者の負担とする。
 - (4) 著者に対しては、別刷20部を贈呈する。それ以上は著者の負担とする。
 - (5) 学術誌に掲載された論文の原稿は、原則として返却されない。
 - (6) 学術誌に掲載された論文の著作権は、日本心理学会に帰属し、無断で複製あるいは転載することを禁ずる。
11. 論文の掲載には、諸経費が必要である (2.11, p.49)。
 12. 不明な点についての問い合わせ先は下記の通りである。

社団法人日本心理学会編集部

電話 03-3814-3953

e-mail psychj@ceres.ocn.ne.jp

“心理学研究”と“*Japanese Psychological Research*”の沿革

“心理学研究”（欧文名は“*The Japanese Journal of Psychology*”）は日本心理学会が編集、出版する和文の機関誌で、心理学に関する論文を公刊する。“心理学研究”は旧日本心理学会会則第4条に基づいて、大正15年（1926年）4月に第1巻第1輯が発行された。創刊より隔月に発行し、年6冊をもって1巻とするのを原則としていた。なお、10巻までは縦組で1巻は約900ページと決められていたが、11巻（昭和11年）以降横組となり、1巻約700ページと編集規定に決められた。

昭和19年以降、数年間は不定期となり、19巻—25巻までは年4冊をもって1巻としている。26巻（昭和31年）以降、年6冊をもって1巻とする原則にもどった。発行不定期時の巻輯・号の発行年月は、19巻1輯（昭和19年7月）、同2輯（昭和23年3月）、同3・4輯（昭和24年6月）、20巻1号（昭和24年9月）、同2号（昭和25年3月）、同3号（昭和25年6月）、同4号（昭和25年12月）である。21巻（昭和26年）以降は年1巻である。最近の第74巻（2003年度）の総ページ数は574ページとなっている。

“*Japanese Psychological Research*”は日本心理学会が編集、出版する欧文の機関誌で、国内の原著論文を広く外国に知らせる目的で1954年3月に1号が発行された。以後、4年間に不定期に5冊刊行されたが、1958年よりは年2冊刊行となり、1960年以降は年4冊となり巻号制を採用することとなった。それにより不定期に刊行された1号より9号までがまとめられて第1巻とされ、1960年度刊行のものが第2巻となり、以後1年1巻4号の刊行が続けられている。なお、第1巻はA5変形判であったが、第2巻より、“心理学研究”と同じB5判となった。最近の第45巻（2003年度）の総ページ数は270ページとなっている。

第1章 原稿の作り方

“心理学研究”ならびに“*Japanese Psychological Research*”の誌上に掲載される論文の印刷上の体裁は編集時に最終的に決定されるが、投稿の際にすでに標準的な体裁が整えられていることが望ましい。本章では、原稿を投稿する際に守らなくてはならない一般的な約束が述べられている。原稿が規定どおりに作られていれば、それだけ編集や印刷での事務的処理がより確実なものとなるし、間違いも少なくすることができる。

この章では、論文を作成するために必要な事柄について述べる。

1.1 投稿雑誌の種類と書式

1.1.1 “心理学研究”の原稿

(1) 原著・資料論文

原著は、原則として、問題提起と実験、調査、事例などに基づく研究成果、理論的考察と明確な結論をそなえた研究である。資料は、すでに公刊された研究成果に対する追加、吟味、新事実の発見、興味ある観察、少数の事例についての報告、あるいは新しい装置や方法の考案などの小論文である。

(2) 展望論文

“心理学研究”の展望は、心理学の最近の重要テーマについて、内外の研究状況、その主要成果、問題点等を解説することを目的とする。取り上げるテーマと執筆者については、編集委員会が検討し、依頼する。本文はいくつかの節・項に分け、それぞれに適切な見出しをつける。他は、“心理学研究”原著の執筆の要項に準ずる。

(3) 英文アブストラクト・キーワード

原著、資料、展望には100—175語の英文アブストラクト、およびキーワード3—5項目をつける(見本1.1,p.12)。なお、アブストラクトおよびキーワードは、見やすいフォントおよびサイズを用い、行間はダブルスペースとする。1ページに収めることが望ましい。

(4) 論文の長さ形式

論文の長さは原則として、原著は、本文、図、表、引用文献、英文アブストラクト、キーワードなど全てを含み、刷り上がり8ページ(約19 200字、25文字×32行、800字を1枚として24枚に相当)を限度とする。資料は、本文、図、表、引用文献、英文アブストラクト、キーワードなどを含み、刷り上がり6ページ(約14 400字、25文字×32行、800字を1枚として18枚に相当)までとする。展望は、刷り上がり16ページ(約38 400字、25文字×32行、800字を1枚として48枚に相当)以内とする。ただし、編集

見本 1.1 英文アブストラクトとキーワード

Mood congruent effects of music on word recognition

Two studies were conducted to investigate the mood congruent effects of music on word cognition. In both studies, selections of bright (cheerful, light-hearted) and sad (despondent, mournful, melancholy) music were used to induce either an elated or a depressed mood in participants assigned to one of the two music conditions. In the first study, positive and negative personality trait words and non-words were presented with music to 31 musically unexperienced college students to examine the mood congruent effects of the music on incidental recall of these words. Participants were asked to judge whether the words were positive or negative as quickly and accurately as possible. In the second study, 37 musically unexperienced college students were presented with ambiguous personality trait words with and without music to examine how their interpretations of these ambiguous stimulus words were affected by the accompanying music. Results revealed mood congruent effects on recall, interpretation, and response time, and these findings were consistent with those obtained from other studies of mood effects on cognition, especially on recall. It was suggested that music induces a certain mood which can influence the cognitive processing of other stimuli presented concurrently.

Key words: mood congruent effects, music, personality trait words, recall(learning), response time.

委員会において特に必要と認めた場合はこの限りではない。

論文の原稿はA4判の白色用紙を縦長にして使用する。各ページは、上下、左右に3 cm以上の余白を取り、25文字×32行（800字）とし、10ないし10.5ポイント、またはそれ以上のサイズの文字を用いる（見本1.2,p.14）。英文アブストラクトおよび欧文文献の書き方は“*Japanese Psychological Research*”の書き方に従う。

1.1.2 “*Japanese Psychological Research*” の原稿

(1) Original Article と Short Report

Original Articleは“心理学研究”の原著に相当し、Short Reportは資料に相当する。

(2) アブストラクト・キーワード

100—175語の英文アブストラクト、および3—5項目のキーワードをつける。

(3) 論文の長さ形式

Original Articleの長さは、本文、図、表、引用文献、英文アブストラクト・キーワードなどを含めて、原則として刷り上がり12ページ（約7 800語）を限度とする。Short Reportの長さは、原則として刷り上がり6ページ（約3 900語）を限度とする。ただし、編集委員会において特に必要と認めた場合はこの限りでない。なお、本文は英語とする。

A4判の白色の用紙を用い、各ページは、上下、左右に3 cm以上の余白を取り、見やすいフォントおよびサイズを用い、行間はダブルスペースとする。1ページに入る行数はフォント、サイズにより異なるが、1ページの行数は23行以内を目安とする（見本1.3,p.15）。

1.2 表題のページ

“心理学研究”の表題のページには、表題、著者名、所属機関名を記載し、その下に表題の英訳、著者名（ローマ字）、所属機関名の英訳を書く。“*Japanese Psychological Research*”も、同様の順序とする。論文審査の際に著者名と所属機関名を伏せる必要上、提出する4部の原稿のうち2部は表題のみ記載し、著者名、所属名を記載しないものを提出する。

1.2.1 表題

表題は、個々の論文の内容に即したものとし、副題は、できるだけ避ける。一連の研究の場合でも、番号の異なる同一表題は好ましくない。やむを得ずそうする場合は副題としてそれを用い、主題は別につけて本文中に引用する。“心理学研究”では副題の前後を、2倍ダッシュ（——）で挟み、“*Japanese Psychological Research*”では主題の後にコロンの（:）をつけ副題を続ける。表題の長さは、“心理学研究”では30字を超えないことが望ましい。また、“*Japanese Psychological Research*”では12—15語程度とする。

1.2.2 著者名

“心理学研究”においてもローマ字表示を併記する。著者が、改姓・改名をした場合は、脚注として旧姓（名）を明示することが望ましい。

連名の場合には、

- (1) 共著者として名を連ねるものは、その論文の内容に責任をもつ協力者に限られる。単なる補助者、部分的協力者は、共著者とはせず、必要があれば脚注において氏名を明記する。

見本 1.2 “心理学研究” 本文見本 (A4判用紙に印字されたものを縮小した図)

この企業間のやりとりは相手企業を説得するための相互作用ではなく、消費者という第三者の態度形成を目的とした相互作用であるという点において、これまで社会心理学の領域で扱われてきたものと質を異にしている。この相互作用効果の解明は、社会心理学的仮説を別の視点から検証するという基礎研究的意義のみならず、また比較広告の萌芽期にあるわが国でこれから生じるであろう現象の問題点を指摘するという応用研究的意義をもつものであると考える。

実 験 1

目 的

本研究の主目的は、比較広告のやりとりの中で見られる相互作用効果を明らかにすることであるが、その前にここでは本研究で用いる比較広告が単独でもつ効果を従来広告とも比較し検討する。

方 法

実験参加者 札幌市、下関市在住の学生、社会人90名。(Table 1)

手続き 実験参加者を3群にわけ、各々に刺激広告としてデメリット型比較広告(相手ブランドのデメリットを指摘する比較広告)、メリット型比較広告(自社ブランドのメリットを強調する比較広告)、従来広告(Figure 1)を文書で指示し、その後、広告に対する評価(17項目、Figure 2)、広告提供企業と比較対照企業の企業イメージと商品イメージ(両イメージとも良さ、信頼度、好感度の3項目)を7段階尺度で評定させた。広告に対する評定項目は、Wilkie & Farris (1975)の評定項目に基づき中谷内・石橋(1989)が比較広告評価のために作成した項目を採用した。また、商品・企業イメージの評定は、最近の消費者は好き、嫌いの次元で評価することが多く、それが良さという概念と必ずし

Table 1

Figure 1

Figure 2

見本 1.3 “*Japanese Psychological Research*” 本文見本 (A4判用紙に印字されたものを縮小した図)

are presented bimodally. Moreover, the alertive OR will also occur according to the degree of significance imparted by the covert task.

Experiment 1

The purpose of this experiment is to examine the selective OR under the overt and the covert tasks by using the significant and the non-significant stimuli in the identical modality.

Methods

Participants. Participants were 36 female university students. Their ages ranged from 18 to 23. They were assigned equally and randomly to one of three groups.

Apparatus. The EDR in DC recording was obtained through NIHON KODEN Ag-AgCl biopotential electrodes attached to the palm and the ventral side of the participant's left forearm with standard electrode paste, by use of a NIHON KODEN GSR-2100 bridge box. This EDR was recorded on a NEC-SANEI 8K31 two-channel penoscillograph with chart speed set at 1 mm/s.

Material. Two stimulus series (unimodal presentation) were applied by using visual or auditory stimuli. Figure 1 shows the two stimulus figures (nonsense patterns) used in the experiments. They appeared on a NEC computer (PC-8801) CRT display in a visual angle of five degrees in width and with a 500 ms duration. The two

Figure 1

- (2) 記載の順序は、原則として、研究分担度の大きかったものから順に並べる。
- (3) 著者名とその所属機関の対応がつくように明記する。

1.2.3 所属機関名

- (1) 所属機関名は、日本語の場合は、著者名の後に、英文の場合は著者名の下に、正式の名称を書く。“心理学研究”では日本語と英語の両方を記し、“*Japanese Psychological Research*”では英語で記す。すべての著者について所属機関名、所属機関の所在地、郵便番号、メールアドレスなどを、以下の順で、英字で表示する。必要であれば学部、学科名を記す。

(所属先)，(部局)，(大学名)，(都道府県)，(郵便番号)，(メールアドレス)

(例) Department of Psychology, Faculty of Letters, xxxx University, Tokyo 113-00XX,
xxx-xxxx,xxxxxx@xxx.xxx.ac.jp

“心理学研究”の場合、日本語では大学名のみを明記する。学部、学科、専攻、教室名は必要があれば脚注として付記しても良い。

- (2) 投稿者の所属が、投稿時から変化した場合、あるいは研究を行った機関が、現所属機関とは異なる場合は、所属機関名の右肩に脚注番号をつけ、その旨を明記する。
- (3) 非常勤先など専任以外の勤務先を所属とする場合は、当該機関の承諾を必要とする。

1.2.4 表題ページの脚注

脚注は、本文の欄外に印刷される。表題、著者名、所属に脚注を示す際、その場所の文字の右肩に上つき数字で記す。1.3.3に示す本文中の脚注がある場合にはこれらとまとめて“心理学研究”では脚注として、“*Japanese Psychological Research*”ではfootnotesとして1枚の用紙に記し、通し番号をつける。

次に、表題ページに脚注で示す例を挙げる。

- (1) 文部科学省科学研究費補助金などによる研究の発表である場合、表題の右肩に脚注番号をつけ、その旨を明記する。

“*Japanese Psychological Research*”では次のように記す。たとえば、

This study was supported by a Grant-Aid for Scientific Research, Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology, No.....

- (2) 謝辞を述べたい場合、著者名の右肩に脚注番号をつける。
- (3) 投稿者の所属などが変わったとき (1.2.2, p.13)。
- (4) 連名の場合や表題の下に記された所属機関と異なるところへ別刷を請求してほしい場合は、請求先の住所、氏名、メールのアドレスを英字で脚注に示す。

“*Japanese Psychological Research*”では次の要領で記す。

- (例) Requests for reprints should be sent to Taro Shinri, Department of Psychology, Faculty of Letters, xxxx University, Tokyo xxx-xxxx, xxxxxx@xxx.xxx.ac.jp

(氏名)，(所属先)，(部局)，(大学名)，(都道府県)，(郵便番号)，(メールアドレス)

1.3 本文

1.3.1 見出し

“心理学研究”と“*Japanese Psychological Research*”の原稿では、以下のような見出しが用いられる。見出しには番号をつけない。

(1) “心理学研究”

通常次の3種類の見出し（ゴチック体）が用いられるが、一部を省略してもよい（見本1.4,p.18）。

- i) 中央大見出し——これは紙面の左または右段の中央にボールド体で印刷される。この見出しを使うときには、原稿の中央におく。その下は1行あける。
- ii) 横大見出し——この見出しを使うときには、行をあけず、本文は改行して始める。
- iii) 横小見出し——この見出しを使うときには、行をあけず、左端から1字あけて書き、本文は1字あけて続ける。

(2) “*Japanese Psychological Research*”

通常次の3種類の見出しが用いられる（見本1.5,p.19）。

- i) 中央大見出し——この見出しを使うときには、原稿の行の中央にボールド体で各主要語の第1字だけ大文字で、その他は小文字で、ピリオドをつけずに印字する。
- ii) 横大見出し——この見出しを使うときは、原稿の行の左端から各主要語の第1字だけ大文字で、その他は小文字で、ピリオドをつけずにイタリック体で印字する。本文は必ず改行して始める。
- iii) 横小見出し——この見出しを使うときは、行の左端から2字あけ、第1語の第1字のみ大文字で、ピリオドをつけてイタリック体で印字する。本文は、同行に5字あけて続けて印字する。

1.3.2 段落・見出し以外の序列

読者の理解を助けるために、内容のまとまりごとに段落をつける。段落ごとに改行し、左端から全角1文字（半角なら2文字）字下げする。

段落に序列をつける場合は、

1. ...
2. ...
3. ...

のように算用数字で番号をつけ、順次改行して用いる。さらに文章中、または段落内で序列をつける場合には、

- (a) ..., (b) ..., (c) ...

のようにアルファベットに括弧をつけ、改行せずに続けてゆく。

1.3.3 本文中の脚注

脚注は、論旨を進めていくうえで参考になることや、本文中に入れると混乱を招くようなことからの補足的説明に用い、最小限にとどめる。なお、全ての脚注は1箇所にとどめ、通し番号を付け、本文の最後（引用文献の次の頁）に添付する。

見本1.4 見出し見本（心理学研究）

横小見出し

このように、生理、心理学的なモデルは、興奮・抑制の2峰性の過程から、抑制・興奮・抑制という3峰性の過程へと移行してきた。光刺激のオン・オフに対する典型的な VEP は3峰性の波形を示しており、このモデルを援用できると考えられる。つまり、ここで心理生理同型説の立場をとるのであるが、現在、これを直接説明する生理学的な証拠はみあたらない。しかし、ヒトの場合、時間差の大きな順向抑制経路が存在すれば、本モデルの生理学的な妥当性が裏付けられる。外側膝状体をはじめ中枢神経系では抑制系がきわめて発達しており、その可能性は十分考えられる。また、情報論的にも、この抑制・興奮・抑制の系列は、通信系の時間的エッジを強調する基本的な手続きとみなされる。

本研究では、光刺激のオン・オフに対する VEP は、それぞれオンとオフの独立したシステムの興奮・抑制の過程を重ねたものであり、抑制は興奮よりも早く発生し長く持続するという仮定を導入し、モデルを構成する。この興奮と抑制の二元過程をもとに VEP の最適パラメータを求め、さらにパラメータを刺激条件から全体的に構造化することによって波形の再現性を検討する。そして、このモデルから導きだされる性質を脳波の特性および知覚現象との関係から考察し、その妥当性を検討していく。

中央大見出し

→ 実験

光刺激のオン・オフに対する典型的な VEP を記録する。脳波誘導は、視覚に便宜な後頭中心部に限定する。実験要因としては、時間的な興奮・抑制過程をみるためにコントラスト条件を設け、また、空間的な興奮・抑制過程をみるために大きさの条件を設定した。

横大見出し

→ 方法

横小見出し

→ **実験参加者** VEPの実験によく慣れた健康な成人男子1名。この実験参加者は、瞬目、眼球運動、体動などを統制でき VEP の波形も安定している。

横小見出し

→ **視覚刺激** 刺激光の形は円形であり、その中心部には黒い固視点がつけられている。刺激条件は、コントラスト3条件×大きさ2条件で、計6条件を設定した。コントラストは、順応光 (50cd/m²) に対する輝度増分の比 ((刺激輝度-順応輝度)/順応輝度) として表し、L条件

設計ブロック、1732) から信号を送り、輝度変調と提示時間調節を行なった。

→ **VEP 記録** 脳波は、銀-塩化銀血電極を用いて、右耳朶を不閃電極として後頭中心部 (Oz) から単極導出した。これを、高感度生体アンプ (日本電気三栄、直流ヘッドアンプ 1804、生体電気直流通幅ユニット 1169) を通し、時定数 0.3s で増幅した。この電位をマイクロコンピュータ (日本電気、PC9801VM21) に組み込んだ AD 変換ボード (カノーパス、ADX-98E) により、サンプリング・タイム 2ms で 1024 点 (2048ms) をデジタル記録した。

横小見出し

→ **手続き** 基本的な VEP の波形を得るために、あらかじめ視覚刺激の中心部と Oz 付近の電極の対応位置を調整した。電極の位置がずれると単峰性波形となる場合があるからである。実験参加者は、シールド暗室の椅子に座り、順応光のもとで 15 分間の順応を行なった。次に、CRT 管面から 57cm の位置にある顔面固定器に頭部を固定し、両眼視によって刺激光を凝視した (人工瞳孔は用いていない)。実験参加者が「固視点を凝視しスイッチを押すと、その 200ms 後に刺激が開始される。刺激間隔は、およそ 10 - 15s であった。1 目 1 回のセッションで、各条件について、それぞれ 50 回のデータを記録し、日を変えて 6 回繰り返し、条件ごとに総計 300 回の記録を行なった。刺激提示順序は、セッションごとに変えてある。

横小見出し

→ **VEP の算出** 各条件について 300 回の原脳波を加算平均し、15 ポイントの重みづけ移動平均 (南, 1986) をかけた。これをもとに、オン刺激から 400ms までを ON-VEP、オフ刺激から 600ms までを OFF-VEP として切り出し、それぞれ刺激による波形変化開始点をベースラインとして調整した (以下、それぞれの VEP を ON, OFF と表す)。

横大見出し

→ **結果と考察** 実験で得られた ON と OFF の原 VEP は、Figure 1 の左列に示されている (RAW VEP)。左側の英数字は、刺激の大きさ (2°, 5°) と、コントラスト (L,M,H) の条件を示している。このデータは、予備実験等で得られた他の実験参加者の波形と類似しており、典型的とみなされる。

まず、ON についてみると、2° では、約 150 ms の負

(吉田 茂 (1990). オン・オフ視覚誘発電位の二元過程モデル 心理学研究, 61, 322-328. より一部変更して引用)

段落内の序列

→ 段落の序列

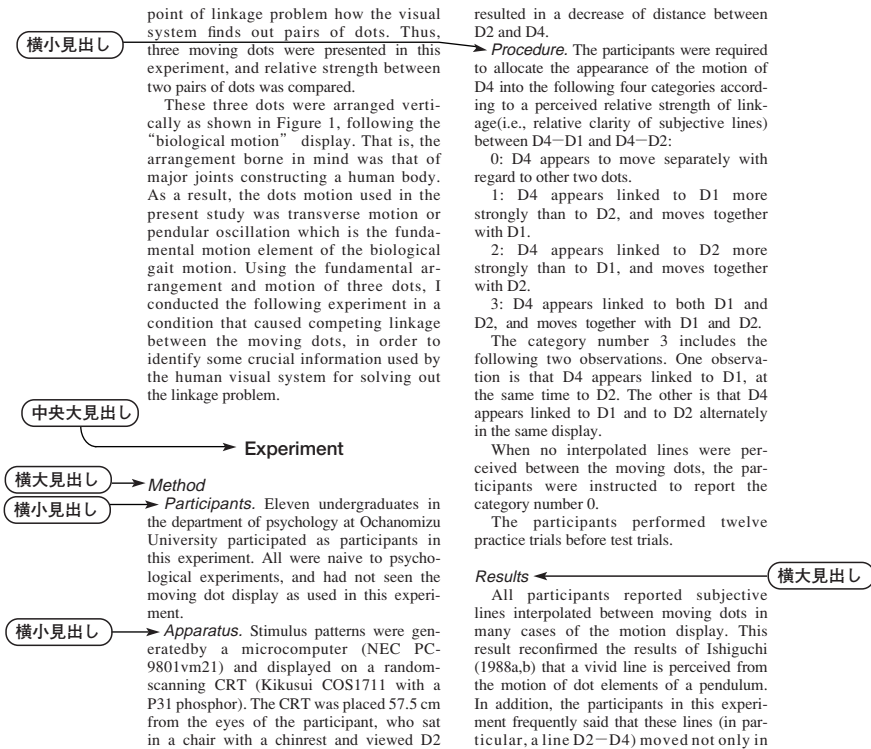
7通りの順序リストが用意され、ほぼ同数の実験参加者がランダムにわりあてられた。どちらのカテゴリを先にするかは実験参加者の半数ずつで逆になるようにした。2つめのカテゴリでは円と赤の練習課題は省いた。全課題を通じて、実験参加者の反応にはすべて「そうだね」と答え、それ以外のフィードバックは一切行わなかった。

2. 大学生に対する課題：質問紙を用いて集団で行った。(a) 典型性判断：幼児における練習課題に対応するものとして、色や概念のカテゴリの事例間ではそのカテゴリの事例らしさが異なることを教示でまず簡単に説明した。その後、幼児と同様の事例の対について「よりらしい」方の選択を求めたが、事例名は文字によって呈示された。対の呈示順については幼児の場合と同様の注意が払われた。(b) 事例のイメージ特性に関する評定：典型性判断に関して得られる主軸と重相関のある特性を求める分析に用いるために、各事例について 15

段落内の序列

(菅 真佐子 (1987). 自然概念の事例の典型性判断における発達的变化——4歳児, 6歳児, 大学生の比較——心理学研究, 58, 226-232. より一部変更して引用)

見本1.5 見出し見本 (*Japanese Psychological Research*)



(Ishiguchi, A. (1991). Effects of change of spatial distance between moving dots on their apparent linkage. *Japanese Psychological Research*, 33, 86-96. より一部変更して引用)

1.3.4 句読法

(1) “心理学研究”における句読法

i) 句点（。）と読点（，）

“心理学研究”では句点はマル（。）を用いる。また読点はカンマ（，）を用いる。

ii) 黒丸（中黒）（・）

並列する同種の語を列挙する場合、あるいは外国語のかな書きの場合などに、語と語の間に黒丸を用いる。

iii) ハイフン（-）

欧語の対語・対句の連結、合成語に用いる。

iv) ダッシュ（—）

これには1字分と2字分のものがある。1字分のダッシュは期間や区間を示すのに用いる。波線（～）は用いない。また2字分のダッシュ（2倍ダッシュ：——）は注釈の説明を挿入する際に用いる。なお、半字分ダッシュ（2分ダッシュ：-）は、日本語では対句、英文では期間を表すのに用いられる。

v) 引用符（“ ”）

引用符には“ ”を用いる。引用文中さらに引用のある場合は、外側に“ ”を用い、内側を（’）とする。

vi) 括弧

原則として、2重括弧の場合を含め（ ）を使用する。

vii) コロン（：）

コロンは、例、説明、引用文などを導く場合などに用いる。

viii) セミコロン（；）

検定結果を列挙する場合、あるいは括弧内に引用文献を列挙する場合にのみ用いる。

(2) “*Japanese Psychological Research*”の句読法

i) ピリオド（.）とカンマ（，）

ii) ハイフン（-）

合成語に用いる。

iii) 引用符（“ ”）

引用符には“ ”を用いる。引用文中さらに引用のある場合は、内側を（’）とする。

iv) 括弧

原則として、2重括弧の場合を含め（ ）を使用する。

v) コロン（：）

コロンは、例、説明、引用文などを導く場合などに用いる。

vi) セミコロン（；）

検定結果を列挙する場合、あるいは括弧内に引用文献を列挙する場合にのみ用いる。

1.3.5 欧語・欧字

“心理学研究”では、本文中における専門用語の欧語・欧字の表記を可能な限り避けるようにする。やむをえず用いる場合には、半角で印字する。なお、“心理学研究”では、次の場合にのみ欧語・欧字を用いることができる。

- (1) 外国人名
- (2) 欧語の術語をそのまま用いることはあまり望ましいことではない。必要があれば、日本語術語の初出のときにのみ欧語を書き添える。
- (3) 本の題名・テスト名
- (4) 動植物のラテン語学名

1.3.6 片仮名・略語

- (1) 片仮名

“心理学研究”では、動植物の和名を片仮名で書く。また、外国語、外国地名、国名は一般に日本語化された用法に従って片仮名で書く。

- (2) 略語

一般に用いられている略語以外はなるべく用いない。略語法について注意すべき点を次に列挙しておく。

- i) テスト名の略語や長い専門語の略語を用いるときには、原名が日本語でない場合は、初出のときに日本語訳の後に、(原名：以下... とする)として略語をつける。原語が日本語の場合は、初出のときに原語の後に括弧でくくった略語をつける。
- ii) 略語には大文字を用いる。字間をあけたりピリオドをつけたりする必要はない。特にピリオドをつけた形で用いることが慣習になっている場合には、慣習どおりの形で用いる。
- iii) 実験者、実験参加者、観察者を意味する *E, S, O, VI, Vp* などの略語は用いない。

1.3.7 特殊文字

- (1) イタリック体を用いる場合

- i) “*Japanese Psychological Research*” の横大見出しと横小見出し (見本 1.5,p.19)
- ii) 本文中に引用されている欧文書籍の表題と欧文雑誌の名称
- iii) 数式中の数を表わす文字
- iv) 数値や量を表わす文字
- v) 統計法に用いられる記号 (例 *M, SD, t, F, p, df, ns* など)
- vi) 動物・植物のラテン語学名および特殊な述語
- vii) イタリック体を本文中の欧語を強調するために用いることは望ましくない。

- (2) ボールド体を用いる場合

原則として“心理学研究”の各見出しに限られる。本文中で特定の語句を強調するためにボールド体を使用することは望ましくない。

- (3) アンダーライン・傍点は、原則として用いない。

1.4 数字・数式

1.4.1 数字

数を表示する場合は、原則として算用数字を用いる。ただし、欧文中の10未満の数、および文頭では文字で綴る（たとえば文頭では、21 participants...ではなく、Twenty-one participants...とする）。“心理学研究”では純粋な数の概念から離れすぎたもの、物の名称になっているもの、慣習として特殊な語感を有するものなどには漢数字を用いることができる。ローマ数字は原則として事例番号、あるいは慣用語（たとえばType II error）などを表示するときのみ用いる。

1.4.2 数式

論文中の数式には、すべて通し番号をつける。数式の書き方と並べ方について注意すべき点を列挙しておく。

- (1) 通常の文章ソフトで表しにくい数式は、別のソフトで作成し、本文の該当箇所に貼り付ける。
- (2) 二つ以上の関連する数式を続けて上下に並べて書くときには、等号の位置でそろえる。

1.5 単位

計量単位は、原則として国際単位系（SI）を用いることになっている。

上記以外の単位も編集委員会で適当と認めた場合は使用できる。

1.5.1 国際単位系（SI）

7個の基本単位と組立単位（付録1-1, p.54）、組立単位（付録1-2, p.54にその一部を示す）があり、それぞれ固有の名称と記号が与えられている。基本単位、および組立単位、ならびにそれらに併用できることを国際度量衡委員会が認めている単位のうち、心理学に関係あるものを記す（付録1-3, p.55-57）。

1.5.2 単位を表わす接頭語

上記の基本単位、補助単位、組立単位、併用単位のままでは大きすぎたり、小さすぎたりする場合、その10の整数倍（10倍、100倍、...、1/10、1/100、1/1 000、...）を表わす接頭語が使用できる（付録1-4, p.57）。

1.5.3 文字単位記号の使用

- (1) 単位記号は、立体文字（イタリック体でない通常の字体）を用い、一般に小文字で表わす。ただし、記号が固有名詞に由来する場合と、 10^6 以上の接頭語には大文字を用いる（付録1-4, p.57）。本学会では、本文中に、文字で示す必要がある場合は片仮名を使用する。ただし、秒・分・時・日などの時間の単位、秒・分・度などの角度の単位、温度の度、ならびに平方、立方、回、毎については漢字を用いてもよい。
- (2) 時間の単位 min (分), h (時), d (日), 角度の単位 $^{\circ}$ (度), $'$ (分), $''$ (秒), セルシウス度 (摂氏) ($^{\circ}\text{C}$) は使用できる。
- (3) 単位記号には、複数形やピリオドをつけない。たとえば min. のようにピリオドはつけず、min とする。接頭語は1個のみを使用し、単位記号の前にそれと一体のものとして示す。ただし、基本単位の kg のみは kg でなく、g に1個の接頭語がつくように接頭語を選ぶ。たとえば、1 kkg ではなく、1 Mg とし、 $1\text{ m}\mu\text{m}$ は m の前に二つの接頭語がつくので避け、1 nm とする。
- (4) 単位の前にくる数値が0.1から1 000の範囲になるように接頭語を選ぶ。たとえば2 000 kg でなく 2 Mg とし、0.003 94 m でなく 3.94 mm とする。ただし、同一の表や一連の文章の中でいくつかの数値を比較するときなどは、この範囲を超えても同一の接頭語を用いたほうがよい。
- (5) 組立単位に接頭語をつける場合は、接頭語が先頭にだけつくようにする。たとえば $1\mu\text{m/ms}$ でなく 1 mm/s とする。
- (6) 組立単位が2個以上の単位の積として構成されている場合は、乗法の記号として、 $\text{N}\cdot\text{m}$ のように点をはさんで表わすが、誤解の恐れがなければ Nm のように点を省略してもよい。しかし、これを mN と表わしてはいけぬ。mN はミリニュートンでニュートン・メートルではない。m は、“ミリ”と“メートル”の両方を表わすので特に注意する必要がある。
- (7) 組立単位が2個以上の単位の除算で構成されている場合は、 m/s のように斜線、 $\frac{\text{m}}{\text{s}}$ のように水平線、または、 $\text{m}\cdot\text{s}^{-1}$ のように負の指数、のいずれで表わしてもよい。ただし、斜線を2個以上使用してはいけぬ。たとえば、 W/sr/m^2 とはせず、 $\text{W}\cdot\text{sr}^{-1}\cdot\text{m}^2$ または $\text{W}/(\text{sr}\cdot\text{m}^2)$ とする。
- (8) 量を表わす数字と単位との間には100 m のように空白をおく。またやむをえず大きな数を表示しなければならない場合は86 400 m のように3桁ごとの区切りに空白をおき、コンマはつけない方がよい。
- (9) 接頭語を含む記号に、 $1\text{ cm}^3, 1\text{ ms}^{-1}$ のように正または負の指数がついている場合は、その指数は単位記号と接頭語の全体に適用される。すなわち、 1 cm^3 は $(0.01\text{ m})^3$ を意味し、 1 ms^{-1} は $(0.001\text{ s})^{-1}$ を意味する。ただし、記号についている指数は記号の前の数値には適用されない。
- (10) dB (デシベル) はSIに含まれないが、本学会では使用することができる。

1.5.4 SIに適しない例

従来使用されてきた単位のうち、SI単位系では不相当とみなされる例とその正しい表わし方を付録に示す（付録1-5, p.58）。

1.5.5 統計記号と式, その他

- (1) 数式中の記号はイタリックにする。
- (2) 統計概念の記号として用いる文字は、イタリックとする。疑問の点はJISなどを参照する。原則として、分散分析表は含めない。 $t()$ 、 $F()$ などの書き方については、“竹内 啓(編) 1989 統計学辞典 東洋経済新報社”の凡例などを参照のこと。

資料に対して行った各種統計的検定の結果を文末で示すときには、文をカンマで区切り以下のようにつづける。

$$F(1,10) = 6.18, p < .05; F(4,40) = 22.71, p < .01, MSe = .005.$$

$$t(22) = 6.16, p < .01.$$

$$\chi^2(4, N = 90) = 10.51, p < .05.$$

- (3) 百分率はすべて%の記号を用いる。
- (4) 特殊な記号、たとえばHullの理論に用いられているsHRのようなものは、特に明記し、大文字、小文字、字体、上つき、下つきなどを明確にしておく。

1.6 引用・言及

1.6.1 文献の引用

- (1) 著者名・出版年

本文中に文献を引用する場合、著者名の直後に出版年を添える。

- i) 本文中に文章として入れる場合

“Endo (2004) は...”、“福富 (2003) によれば...”

- ii) 括弧内に文献を示す場合

“...である (Hagiwara, 2002).”、“...という (原田, 2001).”

- iii) 同一著者で、同一年次に刊行された文献がいくつかある場合

年次を示す数字の直後にアルファベット小文字 a, b, ..を付して区別する。

たとえば“Russell (1993a)”, “Russell (1993a,b)”とする。

- iv) 異なる著者で、同一姓、同一年の文献の引用があり、混同の恐れのある場合

原著が欧語であればイニシャルを、日本語であれば名を添える。

たとえば, “C. L. Hull (1943)”,

“(南 博, 1980)”あるいは“(H. Minami, 1980)”とする。

- (2) 自著の引用

投稿者自身の既刊文献の引用は, “著者は...”などとせず, “箱田 (2000) は...”のようにする。

(3) 共著

引用文献が2人の著者の共著である場合は、引用のたびごとに両著者の姓を書く。“心理学研究”の日本語文献では文中に文章として入れる場合、括弧内に文献を示す場合ともに著者名の間は“・”で結び、欧文献の場合は“&”で結ぶ。また“*Japanese Psychological Research*”の場合は、本文中に文章として入れる場合では“and”，括弧内に文献を示す場合には“&”を用いる。

文中に文章として入れる場合、

“服部・速水(1999)は...”，“Inui & Ishii (2001)によれば...”，

“Inui and Ishii (2001) showed...”

括弧内に文献を示す場合

“... (本田・堀, 2000)。”

“... (Kikuchi & Kugihara, 2002).”

(4) 著者が3人以上の場合

著者が3人以上の場合は、初出の際には全著者の姓を書く。2度目以後は、第1著者の姓を書き、日本語文献では原著が日本語であれば、その他の著者は“他”と略す。欧語文献であれば“et al.”と略す。

初出（文中に文章として入れる場合）

“無藤・仲・大淵（2003）は...”，“Muto, Naka, & Ohbuchi（2003）は...”

“Muto, Naka, and Ohbuchi（2003）showed...”

初出（括弧内に文献を示す場合）

“(沖田・椎名・下仲，2003)”，“(Okita, Shiina, & Shimonaka, 2003)”

2度目以降（文中に文章として入れる場合）

“沖田他（2003）は...”，“Okita et al.（2003）は...”

“Okita et al.（2003）showed...”

2度目以降（括弧内に文献を示す場合）

“(沖田他, 2003)”，“(Okita et al., 2003)”

(5) 翻訳書の引用

翻訳書を引用する場合は、原典とその出版年を最初に引用し、その後に翻訳書の訳者とその出版年を括弧でくくる。また、括弧内に文献を示す場合には、両者をスペースでつなぐ。

文中に文章として入れる場合

“Hebb(1972 白井他訳 1975)...”とし、

“Hebb(1972)”あるいは“Hebb(1975)”とはしない。

括弧内に文献を示す場合

“(Hebb, 1972 白井他訳 1975)”

(6) 文献引用の順序

本文中の同一箇所で行くつかの文献を引用するときには、文末の同じ括弧内に著者の姓のアルファベット順にセミコロンで区切り、また同一著者については出版年順に並べてそれらをカンマで区切り示す。

“(石井, 1998; Kugihara, 1998, 2000; 南・三浦・釘原, 2001; 鈴木他, 1995)”

(7) 特定のページの引用

文献の特定ページを引用するときには、出版年の後にそのページ数を書き添える。表、図の参照を示すときもこれに準じ、図表の番号の記載形式は原典を踏襲する。

“(Takagi, 2003, pp.150-152)”, “(Takagi, 2003, p.140, FIGURE 3)”

(8) 電子媒体からの引用

電子媒体からの引用は、極力避ける。但し、やむをえず引用する場合には電子媒体からの削除が予想されるので、必ずコピーをとって保管し、編集委員会からの請求があった場合、速やかに提出できるようにする。

1.6.2 文章の引用

- (1) 文献の記述の一部を直接引用するときには、原文（訳文）のとおり正確に転記する。
- (2) 引用文は別行とせず本文に続け、引用符（“ ”）で囲む。
- (3) 引用文中にさらに引用句があるときには、一重引用符（‘ ’）を用いる。
- (4) 引用文には、末尾に著者の姓、出版年、記載ページを書き添える。
- (5) 原典が入手困難のために翻訳書による場合は、翻訳書の引用の仕方に従い、該当ページを明記する。

“(Ebbinghaus, 1885 宇津木訳 1978, p.93)”

- (6) 文章を引用する際には、著作権所有者の許可が必要なことがあるので注意すること。
- (7) 引用文に手を入れた場合
 - i) 引用者が引用文に訂正を加えたり追加をしたりした語句は、角括弧 “[]” に入れて引用原文とはっきり区別する。
 - ii) 引用原文の一部を省略した場合には、ピリオドを三つ重ねたもの “...” で示す。

1.6.3 表・図の引用

- (1) 論文中の表や図について本文中で言及するときは、Table1, Figure 1 のように指示し、“次表”、“下図”などの表現は用いない。
- (2) 他の文献の表や図を引用する場合は、その旨が明確になるように所在（著者名、出版年、所在ページ、表・図の番号を括弧内に明記する）を書き添え、論文中の通し番号を付ける。原典の図表番号の記載形式は原典を踏襲する。

“Figure 3. Boring の奥行視の実験状況 (Boring, 1930, p.120, FIGURE 2)”

- (3) 表・図の引用にあたっては、著作権者の許可を必要とする場合もあるので注意する。

1.6.4 人名・機関名への言及

- (1) 本文中、人名に言及するときは、初出の際には略さずに姓名を明記し、以後姓のみを記す。西洋人名のファースト・ネーム、ミドル・ネームはイニシャルでよい。ただし、引用文献指示の際の表記は前出（1.6.1 p.24）の方法による。
- (2) 人名には、謝辞の場合を除き、一切敬称や肩書きをつけない。
- (3) 本文中で言及した人名に所属機関を書き添える必要があるときには、人名の直後に括弧に入れて示す。
- (4) 本文中、研究機関名に言及するときには、初出の際には略さず正式名称を明記する。以後は略記してもよい。

1.7 表（見本 1.6,p.28）

1.7.1 表の原稿

(1) 表の用紙

表に用いる用紙はA4判の白紙を用い、1枚の用紙に一つの表を書く。

(2) 表の大きさ

“心理学研究”の表の一行の文字数は、日本語（全角）で25文字（半角の数字またはアルファベットの小文字で50文字），“*Japanese Psychological Research*”では約40字（数字または小文字）以内（刷り上り半ページ幅）、または2倍以内（全幅）になるようにする。なお、表は約50行が1ページに相当する。但し、表におけるアルファベットの大文字は全角扱いとなることに注意されたい。

1.7.2 表作成上の一般的注意

- (1) 表の作成にあたっては、読者に研究結果を最も効果的に伝えることができるように工夫する。表と図の内容の重複を避けると同時に、必要な情報は漏れなく記載されていなければならない。
- (2) 表の項目は、左揃えとする。
- (3) 数値は、有効数字を考慮して表記する。また、数字は小数点の位置、小数点以下の桁数をそろえる。
- (4) 数値の単位は、数字が縦に並ぶときはその数値に関する見出しの下、横に並ぶときは見出しの右に書き入れる。
- (5) 表中の数字がすべて1以下の場合（たとえば相関係数）は、0をつけずに.52のように小数点以下のみを書く。
- (6) 特に強調したい部分は、ボールド体を用いる。
- (7) 表中の線はできるだけ少なくし、適当にスペースをとる。縦罫は最小限として、斜線は用いない。
- (8) 表全体に関する補足には、表の注を用いる。このとき、表の注の符号を表の題の最後につける。同様に表中に略語・記号を用いるときには、各表に注記をつける。
- (9) 表の挿入希望位置を原稿の右横に指定する。

見本1.6 表の見本

Table 1
Summary of descriptive statistics for eight cognitive tasks ($N = 96$)

Measure	<i>M</i>	<i>SD</i>	Minimum	Maximum	Reliability
Intelligence					
Sentence Completion Test	18.7	3.6	8	24	.59 ^{a)}
Word Order Test	5.5	1.4	2	9	.75 ^{a)}
Plate Matching Test	7.3	2.1	3	12	.52 ^{a)}
Paper Folding Test	6.4	1.6	2	10	.88 ^{a)}
Working memory					
F-RST	53.4	10.2	25	71	.90 ^{b)}
NF-RST	41.2	10.6	20	68	.88 ^{b)}
Reading comprehension					
Reading Test	18.1	4.7	8	32	.84 ^{b)}
Entrance Examination ^{c)}	165.2	18.2	123	198	

Note. F = focus condition; NF = non focus condition; RST = reading span task.

^{a)}Reliability was calculated by adjusting split-half correlations with the Spearman-Brown prophecy formula.

^{b)}Reliability was calculated using Cronbach's alpha.

^{c)} $N = 71$.

Table 2
Correlation matrix for eight cognitive tasks ($N = 96$)

Measure	1	2	3	4	5	6	7	8
1. Sentence Completion Test	—	.21*	.31**	.11	.22*	.14	.36**	.24*
2. Word Order Test		—	.35**	.21*	.19	.16	.26**	.07
3. Plate Matching Test			—	.37**	.12	.08	.20*	.05
4. Paper Folding Test				—	.01	-.05	.20	-.04
5. F-RST					—	.72**	.26**	.48**
6. NF-RST						—	.28**	.42**
7. Reading Test							—	.21
8. Entrance Examination ^{a)}								—

Note. F = focus condition; NF = non focus condition; RST = reading span task.

** $p < .01$, * $p < .05$.

^{a)} $N = 71$.

(近藤洋史・森下正修・蘆田佳世・大塚結喜・苅阪直行 (2003). 読解力とワーキングメモリー ——構造方程式モデリングからのアプローチ—— 心理学研究, 73, 480 - 487.より一部変更して引用)

1.7.3 表の題および説明文

- (1) 表の題または説明文は，“心理学研究”においても，英文アブストラクトの理解を助けるために，原則として英語とすることが望ましい。なお，図の題を英語とした場合は，表の題も英語とする。
- (2) 表の番号は論文中に示す順序に従ってTable 1, Table 2のように算用数字で通し番号をつける。次の行に表の題をつけ，末尾にはピリオドをつけず，中央揃えで表記する。
- (3) 表の題はできるだけ簡潔にする。また表の題に用いる語は本文と一致させる。表の題を英語とし，説明文や表注は日本語とするなど英語と日本語を混在させないように注意すること。

1.7.4 表中の見出し，表の注

- (1) 表中の見出し
 - i) “心理学研究”においても，表の題を英語とした場合には，表の各欄の見出しも英語とする。
 - ii) 英語の見出しの場合，最初の文字は大文字とする。特別な場合を除き，他は小文字とする。
- (2) 表の注
 - i) “心理学研究”においても表の題を英語とした場合には，表の注も英語とする。
 - ii) 表全体に関する補足的説明や表中の特定部分に関する説明は，表の注として本文の注（脚注）とは別に，表のすぐ下におく。
 - iii) 各表の注はそれぞれ別行とし，注の符号のあとに簡明に記す。終わりにはピリオドをつける。
 - iv) 注の符号は，^{a)}，^{b)}，^{c)}，…などの上つき文字を順に用いる。*，**（アスタリスク）などの符号は統計学上の有意水準を示すときにのみ用いる。
- (3) 表における統計学上の符号の表記
“*”，“**”や“+”などの符号は，5%，1%，10%の統計上の有意水準を示すときに用い，数値の右肩に示し，表の下部にその旨を示す。

1.8 図（見本1.7,p.31および1.8,p.32）

1.8.1 図の原稿

図は多くの情報を直感的に理解しやすい形で示すことができるが，かなりのスペースを要するため，厳選し，必要なもののみを，効果的に使用することが望まれる。他の図や表の内容と重複しないよう注意する。

(1) 用紙

表と同じく，A4判の白紙を使用し，1枚の紙に一つの図を描く。

(2) 図の種類

図は，必要に応じて折線グラフ，棒グラフ，散布図など適切な形式を選択する。折線グラフは，連続的に変化する独立変数（横軸）に対応する従属変数（縦軸）の変化を示

すなどの場合に利用されるのが原則である。棒グラフは、一般に非連続なカテゴリーに分類される群の比較などに利用される。散布度を示したいときには、標準偏差または標準誤差を書き加える。散布図は、変数間の関係を示すためなどに利用される。

(3) 図の大きさ

“心理学研究”では、刷上り横幅が7 cm、または14 cm以内、“*Japanese Psychological Research*”では6.5 cm、または13 cm以内となる。見本1.8の実例を参考に、縮尺率を考慮して、文字や線は太めに書く。作成された図を事前に確認し、縦横それぞれ刷上りの約2倍にして投稿すること（掲載時縦は、図の題・注も含めて20 cm以内なら1ページに入る）。

1.8.2 図作成上の一般的注意

(1) 作図

作図には、縮尺を考慮して線の太さを決め、コントラストに留意する。なお、図の作成に当たっては色を使用しない。図作成ソフトを使用して作図する場合、大外の枠、背景色の存在、不要な線の存在など、“心理学研究”や“*Japanese Psychological Research*”の図の作成上の注意と異なる点が多いため、注意を必要とする。

(2) 線と点

- i) 軸の途中を省略する場合は、そこに波形、または斜の線をいれて切り取ったことを示すとよい（見本1.8, p.32）。
- ii) 座標軸や曲線、折線の太さは、論文を通じて一定にする。座標軸の太さはその図中の一番太い曲線、折線と同程度にする。
- iii) 目盛は軸の内側に描く。同一論文中に比較対照すべき複数の図があるときは、全部に同じ目盛りを用いる。
- iv) 白丸など白抜き点の点は、印刷すると黒点と区別しにくくなることもあるから大きめに描く。

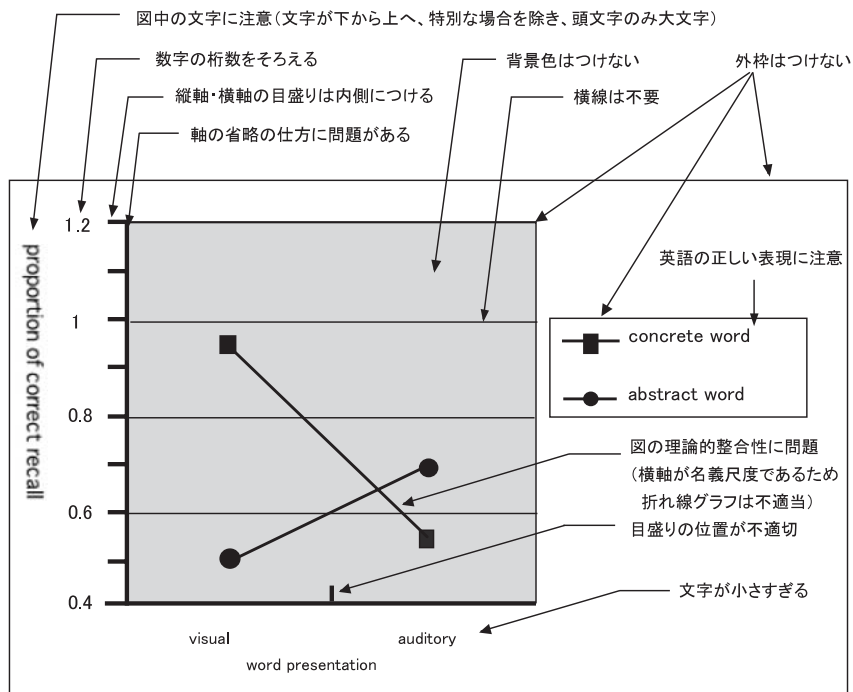
(3) 図中の文字

- i) 図の題または説明文は、“心理学研究”においても、英文アブストラクトの理解を助けるために、原則として英語とすることが望ましい。また図中の文字もこれに準じる。なお、表の題を英語とした場合は、図の題も英語とする。
- ii) 図中の文字は縮尺を考慮して大きさと太さを決める。Psychological Abstractのように図中の単語の頭文字は大文字とする。ただし、単位はSI（付録1, p.54 – 58）に従い、大文字か小文字かを決める。
- iii) 座標の説明とその単位は各軸の外側中央に示す。図中の文字と同様、単語の頭文字は大文字とする。縦軸の説明語句が日本語の場合は縦書きとし、英語の場合は下から上に向かって横書きで書く。

(4) 図の番号、図の題

- i) 図の番号は、論文中に示す順序に従ってFigure 1, Figure 2のように算用数字で通し番号をつける。図の挿入位置を原稿の右横に指定しておく。

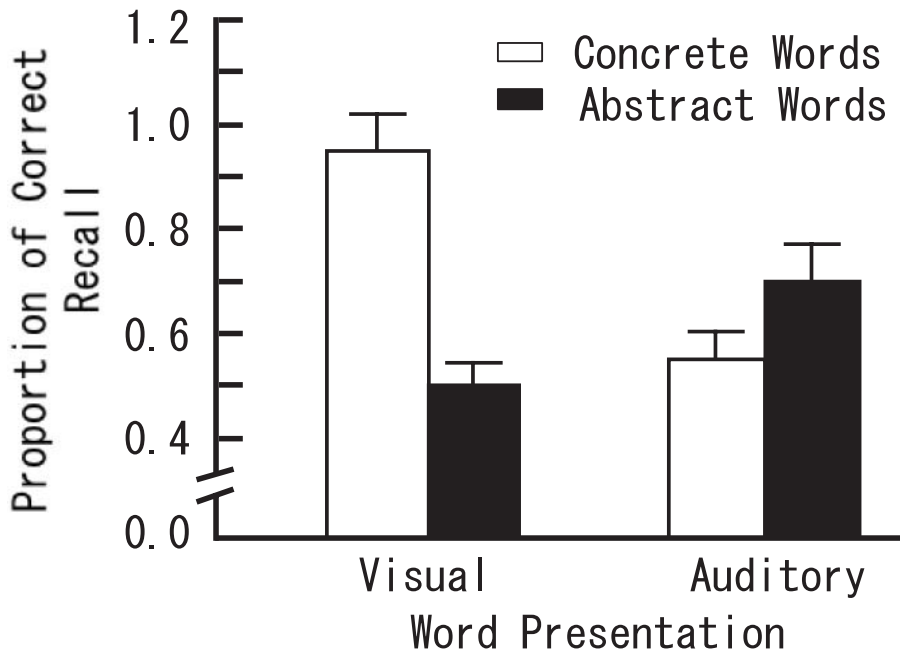
見本1.7 図の描き方（悪い図の例）



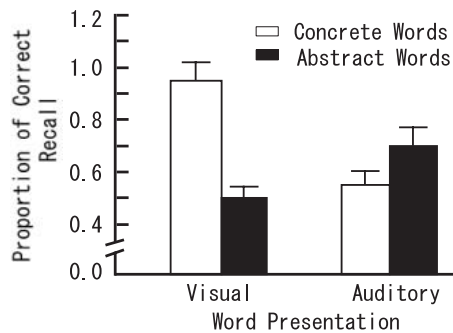
“作図の際の留意事項”

1. 必要不可欠なものを厳選する
2. 他の表や図と内容が重複しないように注意する。
3. 必要十分な内容が記載されている必要がある。代表値に対する散布度，標本数などが重要な意味を持つ場合には，それらを図示する工夫が必要である。
4. 類似した内容の図の形式は，原則として統一する。
5. 図の題は，簡潔でかつその内容を十分に表し得るものであることが望まれる。同時にまた，他の図と異なる内容のものであることが容易に理解できるものでなければならない。
6. 図中の数値，その他の記号の意味は，本文の読まなくても理解できるように図中または図注で説明されている必要がある。
7. 図の種類と図示する事実との間の理論的な整合性に注意する。非連続の名義的なカテゴリーを恣意的に横軸に並べ，折れ線グラフで図示するなどは原則として避ける。横軸で取り扱う独立変数が，連続量であるのか，不連続量であるのかによってグラフの形式は変わってくる。
8. 作図に当たっては，軸の目盛の範囲，目盛の書き方，文字の大きさ，文字の並べ方などに注意して，できるだけ規定にあった図を準備しなければならない。上に悪い例を，次頁にそれを修正した良い図の例を示す。

見本1.8 図の描き方（良い図の例）



図形の手稿はこれくらいの大きさに書く。



上の図を1/2に縮小したもの（実際にはこれくらいの大きさに仕上がる）。

- ii) 各原図の下の余白部分に図の番号および論文の表題を記す。なお、これとは別に全ての図の番号及び題，説明を別紙にまとめて添付する。
 - iii) 図の題は，図の内容を簡潔に表わすものであることが望まれる。“心理学研究”の場合も，英文アブストラクトと図によって論文の要旨が明らかとなるよう，図の題は原則として英語とすることが望ましい。その場合には，図中での説明語句も英語とする必要がある。
- (5) 写真
- 写真も図と同様に取り扱われるので，1枚ずつA4普通紙に印画し，見やすいものであることに留意する。写真と図の番号は通し番号とする。

1.9 引用文献（見本1.9, p.34）

引用文献は論文の最後一括して示す。見出しは“心理学研究”では“引用文献”，“*Japanese Psychological Research*”では“References”とし，中央大見出しとする。読者が検索，参照できるように留意すること。

1.9.1 文献を引用する場合の一般的注意

- (1) 本文と同じA4判の用紙を用いる。
- (2) 余白，行間を充分にとって（上下左右3 cm以上）印字する。
- (3) 表記が2行以上にわたる場合は，2行目以降を全角2文字（半角では4文字）分を下げる。
- (4) 文献の年次は，すべて刊行された西暦年を用いる。2年または3年に1巻を逐次刊行される雑誌などの場合は，1991-92のように二つの年を2分ダッシュ（-）で結んで示す。“心理学研究”のように1年1巻ではあるが，4月から翌年3月までの場合には，掲載年の刊行年による。
- (5) 文献の表題は副題も含めて原著のとおり略さずに書く。日本語の副題の場合には2倍ダッシュ（—）で示す。
- (6) 文献番号はつけない。
- (7) 刊行年次には“().”をつける。
- (8) 記載順は，雑誌の場合は，著者名，刊行年次，表題，雑誌名，巻，ページ，著書の場合は，著者名，刊行年次，著書名，出版社（出版社が外国の場合は所在地を含む），著書の分担執筆の場合は，著者名，刊行年次，表題，編者名，著書名，出版社（出版社が外国の場合は所在地を含む），ページとする。

Paivio, A. (1968). A factor-analytic study of word attributes and verbal learning. *Journal of Verbal Learning and Verbal Behavior*, 7, 41-49.

Paivio, A. (1971). *Imagery and verbal processes*. New York: Holt, Rinehart & Winston.

Peterson, L. R., Rawlings, L., & Cohen, C. (1977). The internal construction of spatial patterns. In G. H. Bower (Ed.), *The psychology of learning and motivation: Advances in research and theory*. Vol. 11. New York: Academic Press. pp. 245-276.

- (9) 原則として，雑誌は巻のみを示し，号数は示さない。ただし，巻で通しページが示され

見本1.9 引用文献例

引用文献

- Blechman, E. A. (1990). *Emotions and family: For better or for worse*. New York: Lawrence Erlbaum Associates.
(ブレックマー, E. A. 松山義則・濱治世(監訳)(1998). 家族の感情心理学 北大路書房)
- Duchenne de Boulongne, G. B. (1990). *The mechanism of human facial expression*. (Tras. & Ed. by R. A. Cuthbertson), Cambridge: Cambridge University Press.(Original work published (1862).)
- Ekman, P. (1965). Differential communication of affect by head and body cue. *Journal of Personality and Social Psychology*, **2**, 725-735.
- Ekman, P. (1992). An argument for basic emotions. *Cognition and Emotion*, **6**, 169-200.
- Ekman, P., Davidson, R., & Friesen, W. V. (1990). The Duchenne smile: Emotional expression and brain physiology, II. *Journal of Personality and Social Psychology*, **58**, 342-353.
- Ekman, P., & Friesen, W. V. (1969a). Nonverbal leakage and clues to deception. *Psychiatry*, **32**, 88-105.
- Ekman, P., & Friesen, W. V. (1969b). The repertoire of nonverbal behavior: Origins, usage, and coding. *Semiotica*, **1**, 49-98
- Ekman, P., & Friesen, W. V. (1978). *Facial Action Coding System: A technique for the measurement of facial movement*. Palo Alto, CA: Consulting Psychologists Press.
- Ekman, P., Friesen, W. V., & Ellsworth, P. (1982). Conceptual ambiguities. In P. Ekman(Ed.), *Emotion in human face*. 2nd ed. Cambridge: Cambridge University Press, pp.98-110.
- 古賀愛人・岸本陽一・寺崎正治 (1992). 多面的感情状態尺度(短縮版)の妥当性 日本心理学会第56回大会発表論文集, 646.
(Koga, A., Kishimoto, Y., & Terasaki, M.)
- 小川時洋・門地里絵・菊谷麻美・鈴木直人 (2000). 一般感情尺度の作成 心理学研究, **71**, 241-246.
(Ogawa, T., Monchi, R., Kikuya, M., & Suzuki, N. (2000). Development of the General Affect Scales. *Japanese Journal of Psychology*, **71**, 241-246.)
- 角辻 豊 (1978). 情動の表出 金子仁郎・菱川康夫・志水 彰(編) 精神生理学 IV 情動の生理学 金原出版 pp.196-209.
(Sumitsuji, Y.)

翻訳書の表記

外国での翻訳書の表記

同一著者の表記
単著を先にし年代順に並べる。共著は単著に続き、第2著者のアルファベット順に並べる。第2著者が同一人物の場合は第3著者と比較する。

外国雑誌の表記及び同一著者の論文が同年にある場合 a,bをつける。

洋書の書籍の表記

洋書の編著書からの章の引用

英文タイトルが不明な場合の表記

日本語論文の引用

日本語書籍の章の引用。欧文タイトルが分かれば記す。

注) “Japanese Psychological Research” では引用文献はReferencesとする。

ていない雑誌に関しては、号数を巻の後に括弧に入れて示す。また、巻のない雑誌は号数を“*No. 5*”のように示す。

所 正文 (1989). 職業生活意識の立体構造分析に関する試論 応用心理学研究, No.14, 1-11.

1.9.2 “心理学研究”中の“引用文献”と“*Japanese Psychological Research*”中の“References”における欧語文献の書き方

(1) 著者名

i) 一般的書き方

著者名は、姓を先に書き、名（その頭文字）の順で書く。イニシャルの後にピリオドをつけ、次に1字あける。もし同姓で、イニシャルも同じ著者があるときは、名も略さずに書く。

Muller, John Robert (2000).

Muller, John Roger (1999).

ii) 共著の場合

すべての著者について、姓を先に、名を後に書く。各著者名はコンマで区切り、最後の著者の前に、カンマと&をおく。andと綴らぬこと。

Suzuki, N., Tanno, Y., & Yama, H. (2004).

Hakoda, Y., & Ohbuchi, K. (2004).

iii) 冠詞や前置詞

(de, la, du, von, van der, della など) を含む姓名については、それぞれの言語によって規則があるから、それに従ってアルファベットの位置を定める。通常は、西洋人名辞典や抄録雑誌（たとえば、*Psychological Abstracts*）の人名索引などで調べるとよい。一般に、原著者が、これらの語を大文字で始めているときは、それによってアルファベット順に記し、小文字で始めているときは、無視して配列する（たとえば、Le BrasはLにより、von Helmholtzはvではなく、Hによって配列する）。

(2) 書籍

欧文文献の書籍の場合は、著者名、刊行年次、表題のほか、原則として、版数、出版地、出版社を書く。固有名詞、ドイツ語の名詞以外は、表題の最初の語の語頭のみ大文字で書く。表題はイタリック体とする。

i) 一般的な例

Gibson, E. J. (1969). *Principles of perceptual learning and development*. New York: Appleton-Century-Crofts.

ii) 新版：初版以外は必ず版数を明記しておく。版 (edition) はed. と略記する。

Hilgard, E. R., & Bower, G. H. (1975). *Theories of learning*. 4th ed. Englewood Cliffs, N. J.: Prentice Hall.

iii) 編集者：编者 (editor) はEd. と略記する。编者が複数のときは (Eds.) と略す。

Schmalensee, R., & Willig, R. D. (Eds.) (1989). *Handbook of industrial organization*.

Amsterdam: North Holland.

iv) 編集書中の特定章

Peterson, L. R., Rawlings, L., & Cohen, C. (1977). The internal construction of spatial patterns. In G. H. Bower (Ed.), *The psychology of learning and motivation: Advances in research and theory*. Vol. 11. New York: Academic Press. pp. 245-276.

v) 数巻にわたる書籍

Freud, S. (1964). *Standard editions of complete psychological works*. London: Hogarth Press. 24 vols.

vi) 数巻にわたる書籍の1巻

Triandis, H. C., & Brislin, R. W. (Eds.) (1980). *Handbook of cross-cultural psychology*. Vol. 5. *Social psychology*. Boston: Allyn Bacon.

vii) 数巻にわたるハンドブックなどの特定章

Stevens, S. S. (1971). Sensory power functions and neural events. In W. R. Lowenstein (Ed.), *Handbook of sensory physiology*. Vol. 1. *Principles of receptor physiology*. Berlin: Springer. pp. 226-242.

viii) 英訳書

Helmholtz, H. von (1925). *Treaties on physiological optics*. Vol. 3. (Trs. & Ed. by J. P. C. Southall) New York: The Optical Society of America. (*Handbuch der physiologischen Optik*. 3. Aufl., 3. Bd. 1910 Hamburg: Leopold Voss.)

(3) 逐次刊行物 (雑誌, 年報, 紀要など)

固有名詞, ドイツ語名詞以外は, 論文表題の最初の単語の語頭のみ大文字とする。雑誌など逐次刊行物の名称は省略せずにイタリック体で記載する。雑誌名の次にコンマを打ち, 巻数をボールド体で印字する。次に引用文献の最初と最後のページを2分ダッシュ (-) をはさんで記し, ピリオドを打つ。

i) 各巻通しページつき雑誌論文

Novik, L. (1988). Analogical transfer, problem similarity, and expertise. *Journal of Experimental Psychology: Learning, Memory, and Cognition*, **14**, 510-520.

ii) モノグラフ, 巻号数, シリーズ通し番号つき

Reese, T. W. (1943). The application of the theory of physical measurement to the measurement of psychological magnitude with three examples. *Psychological Monographs*, No. 251. (Vol. 55, No. 3)

iii) 年報・年鑑から特定章を引用するときには, 書籍のiv) に準ずる。

Gage, N. L. (1964). Theories of teaching. *The sixty-third yearbook of the National Society for the Study of Education*, **62**, 268-285.

iv) アブストラクトの引用

Carpenter, G. C., & Stechler, G. (1967). Selective attention to mother's face from week 8. *American Psychologist*, **22**, 510. (Abstract)

v) 原則として間接引用はしない。止むを得ない場合、その依拠する文献などを明記しておく。

(4) 未公刊資料

i) 学位論文など

Yik, M. S. M. (1998). *A circumplex models of affect and its relation to personality: A five-language study*. Unpublished doctoral dissertation, University of British Columbia, Vancouver, British Columbia.

ii) 印刷公刊されることが確定してはいるが未刊の場合、刊行年の代わりに“(in press)”と明記する。

Ogawa, T. & Suzuki, N. (in press). On the saliency of negative stimuli: Evidence from attentional blink. *Japanese Psychological Research*.

iii) 投稿中または審査中の論文で、印刷公刊されることが確定していない論文の引用は原則としてできない。

iv) 私信の場合は引用文献ではなく、脚注を用いて記載する。引用にあたっては、姓名を書き、“Personal communication”と書いてコンマを打つ。次に年月を書いておく。

Hori, T., Personal communication, 2004 July.

1.9.3 “心理学研究”中の日本語文献の表記の仕方

(1) 著者名・刊行年次

i) 著者名は、姓、名、の順に書き、姓と名の間にはコンマをつけない。ただし、姓と名との境がはっきりしない場合には、姓と名との間を1字あけて書く。姓名の後にはピリオドはつけない。

ii) 共著の場合には、各著者名の間に“・(中黒)”を入れて結ぶ。

iii) 政府・官公庁・研究機関・学協会組織・一般民間組織など団体名義の著作物は、正式の名称を略さずに書き、個人著者名の場合と同様に、アルファベット順に並べる。

iv) 著者名がない文献の場合は、表題によってアルファベット順に入れる。

v) 刊行年次は、年号に“()”をつける。

(2) 書籍

書籍の場合は、著者名、刊行年次、表題のほか、原則として版数、出版社名を書く。

i) 代表例

南 博 (1980). 人間行動学 岩波書店

ii) 新・改訂版(増刷に際し、内容がそのままならば版数の記載は不要)

安田三郎・海野道郎 (1977). 社会統計学 改訂2版 丸善

iii) 編集書・監修書

林 知己夫・鮑戸 宏(編著) (1976). 多次元尺度構成法 サイエンス社

iv) 編集書・監修書の1章

高橋滯子 (1975). 心理学における方法論の史的展開 八木 晃(編) 心理学研究法1 方法論 東京大学出版会 pp. 19-77.

- v) 数巻にわたる書籍（主題を持つ叢書・集書等を含む）
八木 晃（編）（1981-86）. 現代基礎心理学 東京大学出版会 12巻
- vi) 数巻にわたる書籍の特定の1巻
池内 一（編）（1977）. 講座社会心理学3 集合現象 東京大学出版会
- vii) 著（編集・監修）者（個人または団体）自身が刊行者である場合（自費出版など）には、一般書籍の例に準じて記載し、出版社の部分を（自費出版）と書けばよい。
- viii) 翻訳書
Hebb, D. O. (1972). *Textbook of psychology*. 3rd ed. Philadelphia: Saunders.
（ハップD. O. 白井 常・鹿取廣人・金城辰夫・今村護郎（訳）（1975）. 行動学入門 第3版 紀伊国屋書店）
- (3) 逐次刊行物（雑誌，年報，紀要など）
雑誌名の次にカンマを打ち，巻数をボールド体で書く。次に引用文献の最初と最後のページをハイフン（-）で結び，ピリオドを打つ。巻数がなく通しページの付いている雑誌の場合のみ号数を記す。
- i) 各巻通しページつき雑誌論文
八木善彦・菊地 正（2004）. ストループ様課題を用いた注意の負荷理論の検討
心理学研究, **74**, 131-139.
- ii) 各号ごとに独立したページが付されている雑誌論文の場合
1巻を通してのページづけがない場合は，巻数の直後に号数を括弧内に入れて記す。
- iii) 年間2冊またはそれ以上を刊行するが，巻数がなくて通し番号になっている場合（号，輯，集など）
所 正文（1989）. 職業生活意識の立体構造分析に関する試論 応用心理学研究,
No.14, 1-11.
- iv) 年に1回刊行されるもの——年報・年鑑等
各年次ごとに巻・号・輯など番号づけしてあるものは，上の例に準ずる。単に年次のみを示してあるものについては，刊行年次と一致する場合には，刊行年次のみでよい。また一部の引用であれば，書名の後にコンマを付し，その所載ページを記す。刊行年次と表題の年次が異なる場合（たとえば，1961年版で，1960年中に刊行された場合など）には，iii) の例で号数を示している部分に，“19XX年版”などのように記す。
総理府統計局（1990）. 家計調査年報 1989年版 財団法人日本統計協会
- v) 紀要，その他
紀要，報告書の名称が同一で，いくつかの部門，シリーズに分かれているものには，表題の直後に続けて，その部門やシリーズの名称を記す。なお，紀要，報告等の名称に，その大学などの名称が含まれていない場合は括弧に入れて記す。
諸井克英・小山久美（1987）. 対人関係への衡平理論の適用——予備的検討——
人文論集（静岡大学人文学部社会学科・人文学科報告），**37**, 15-40.
荳阪直行（2004）. 意識とワーキングメモリの脳内メカニズムの研究 文部科学省科

学研究費補助金・研究成果報告書

(4) インターネット上の資料，雑誌，新聞の引用

インターネット上の情報，雑誌，新聞の記事を引用する場合も，その出典を明記しなければならない。

i) インターネット上の資料の引用

インターネット上の資料を引用する場合は，著者名，年号，資料題名，サイト名，アップデート日，<URL>，(資料にアクセスした日)

日本心理学会 (2004). 事務局からのおしらせ 日本心理学会 2004年2月13日

<<http://wwwsoc.nii.ac.jp/cgi-bin/jpa/minibbs.cgi?log=log1>> (2004年2月25日)

American Psychological Association (2004). APA topic: ADHD. American Psychological Association <http://www.apa.org/topics/topic_adhd.html> (February 25, 2004)

ii) 新聞記事および雑誌記事の引用

新聞記事および雑誌の記事を引用する場合は，掲載誌（紙）名（もし分かれば執筆者名），発行年，資料題名，発行日時，朝刊・夕刊の別順番で記載する。

ベルコビッツ (2004). 学生の飲酒問題にいかに向かうか 毎朝新聞 11月24日朝刊

毎朝新聞 (2004). 学生の飲酒問題にいかに向かうか 11月24日朝刊

(5) 未公刊資料

i) 卒業論文・学位論文

谷口弘一 (2001). サポートの互惠性と精神的健康の関連に関する研究 ——個人内および個人間発達の見点からの検討—— 広島大学大学院生物圏科学研究科博士論文 (未公刊).

卒業・修士論文の年次は年度によらず，卒業・修了の年をもって示す。また抄録などが公刊されている場合は，それによる。博士論文の年次は学位授与の年による。

ii) 学会などでの発表

予稿集と抄録の双方が公刊されている場合は，抄録掲載雑誌または抄録集を記す。

敦賀麻理子・鈴木直人 (2004). “あがり” 喚起時の精神生理学的反応 感情心理学研究, **11**, 37.

釘原直樹 (2003). 実験仮説と結果を知らせることが集団のパフォーマンスに与える効果 日本心理学会第67回大会発表論文集, 110.

抄録が公刊されていない場合，また書簡，私的な小集会での発表，発言，非公式の意見交換などは私信として扱い，脚注に記す。

iii) 印刷中の論文

印刷公刊されることが確定してはいるが未刊の場合，刊行年の代わりに“(印刷中).”と明記する。

iv) 投稿中の論文

投稿中または審査中で，印刷公刊されることが確定していない論文の引用はできな

い。

(6) 間接引用

間接引用は出来る限り避ける。止むを得ない場合は、依拠するところを明らかにする。

(7) 雑誌記載法

- i) 雑誌など、逐次刊行物の名称は、原則として、省略せず、完全に記載する。
- ii) 類似の紛らわしい名称あるいは全く同一の名称の雑誌がある場合は、原則として、雑誌名の後に、刊行主体（あるいは刊行地）などを括弧に入れて明示する。

(8) 引用文献に記載する日本語文献の英文表記

Institute for Scientific Information (ISI) データベースに多くの文献を登録できるようにするために、日本語の文献にも例のように出来る限り英文表記を付け加える。

豊田秀樹 (1992). SASによる共分散構造分析 東京大学出版会

(Toyoda, H. (1992). *Covariance structure analysis with SAS*. Tokyo: University of Tokyo Press.)

楠見 孝 (1994). 比喩理解における主題の意味変化——構成語間の相互作用の検討—— 心理学研究, **65**, 197-205.

(Kusumi, T. (1994). Semantic change of topic in metaphor comprehension: Interaction of constituent words. *Japanese Journal of Psychology*, **65**, 197-205.)

- i) 著者名のローマ字表記法は、原著者のそれに従う。
- ii) 文献名、その他に英訳がない場合、原著者名だけを記入する。
- iii) 文献名は、原文献に欧文要約、その他の形で原著者による欧訳が付いているときはそれを用いる。これのないときは、可能であれば原著者に確認し、記載する。
- iv) 書籍の場合、文献名の英訳が記載できるときは、出版社名はローマ字（ヘボン式）に直して記載する。
- v) 文献名の英訳が記載できるときは、雑誌名は、発行者のつけた英訳をそのまま用いる。英訳名のない場合には、日本名をローマ字（ヘボン式）に直して記載する。

1.9.4 “Japanese Psychological Research” 中の日本語文献の表記の仕方

- (1) 著者名の表記法は“欧語文献の書き方”に準ずる。ローマ字表記法は原著者のそれに従う (1.9.2 p.35)。
- (2) 刊行年次は、年号に“()”をつける。
- (3) 文献名は、原文献に欧文要約その他の形で原著者による欧訳のついているときは、それを用いる。これのないときには、可能な限り、著者に確認をし、記載する。確認が取れない場合には、適宜英訳したものを記載し“(in Japanese, translated by the author of this article)”と付記する。
- (4) 出版者名は、書籍の場合、ローマ字（ヘボン式）に直して記載する。
- (5) 雑誌名は、発行者のつけた欧訳をそのまま用いる。欧訳名のない場合には、日本名をローマ字（ヘボン式）に直して記載し、括弧内に欧訳を添える。

- (6) 引用文献の中、日本語の文献は、“(in Japanese)”と付記し、日本語の文献であることを明示する。また英文要約のついているものには、“(in Japanese with English abstract)”と明示する。

1.9.5 引用文献の記載順序

- (1) 文献表の各項は、日本語文献と欧語文献を分けず、著者の姓のアルファベット順に配列することを原則とする。同姓の者が複数いる場合には、名のアルファベット順による。

Miller, G.E. (1941).

Miller, N.E. (1969).

- (2) 共著の場合は、第1著者の姓により、アルファベット順に配列する。

Haga, Y., & Ishii, K. (2000).

Ishii, K., & Haga, Y. (1998).

- (3) 同一著者が、単独で発表している文献と、その著者が第1著者として名を連ねている共著の文献がある場合には、単独発表のものを先にし、次に共著のものを並べる。また、第1著者が同一で、第2著者が異なる時は、第2著者の姓のアルファベット順にそれらを並べる。第3著者以下も同様である。

Sugawara, K. (1998).

Sugawara, K., Ogawa, T., & Takehara, T. (2000).

Sugawara, K., & Takehara, T. (2000).

- (4) 同一著者の文献がいくつかある場合、あるいは同一配列の著者名による共著の文献がいくつかある場合には、刊行年次によって、早い年次のものから順に並べる。同一年次に刊行されたものがいくつかある場合、年次を示す数字の直後に、アルファベット小文字 a, b, ... を付して区別する。

文献配列の例を以下に示す。

Watanabe, S. (1999a).

Watanabe, S. (1999b).

- (5) 同一姓、しかもイニシャルが同一になる場合は、名も略さずに書く

Muller, John Robert (1998).

Muller, John Roger (2001).

1.10 英文アブストラクトとキーワード

アブストラクトおよびキーワードは、見やすいフォントおよびサイズを用い、行間はダブルスペースとする。1ページに収めることが望ましい。

1.10.1 英文アブストラクト

“心理学研究”および“*Japanese Psychological Research*”の論文には100—175語の英文アブストラクトならびにその日本語訳を添付する。アブストラクトは目的、方法、結果、考察または結論を含み、次の要領による。

- (1) 用紙は本文と同じA4判を用いる。

- (2) 英文アブストラクトのページには、表題、著者名、および所属機関名は記さない。
- (3) 英文アブストラクトは表題の次のページに、日本語訳は英文アブストラクトの次のページに添付する。
- (4) 英文アブストラクトは、ダブルスペースで印字する。1ページの行数は20–23行とし、上下左右に十分な余白（3 cm以上）を取る。
- (5) 数は算用数字で示す。ただし、10未満の数および文頭は綴る（1.4.1, p.22）。
- (6) 英文アブストラクトの日本語訳は、英文校閲の際に参考にするから、直訳ではなく、著者の意図を平易な日本語でのべたものとする。
- (7) 英文に関しては、必ず専門家に目を通してもらう。なお、審査を通過し掲載の決定した論文の英文アブストラクトは、編集部において英文校閲委員に依頼し、校閲を行なう。

1.10.2 キーワード

英文アブストラクトの下にその論文の分類、検索などのための英語のキーワードを3項目ないし5項目つける。検索の便のため、次の基準に従う。

- (1) キーワードは名詞または名詞句であり、複数形をとり得るもの（countable noun）は複数形で示す。

（例）theory—theories, mouse—mice, child—children

- (2) 略語を使わない。

（例）IQ—intelligence quotient, ANOVA—analysis of variance

- (3) 英文アブストラクトまたは本文中と異なった語を用いてもよい。

（例）hyperactivity—hyperkinesis, quantification—measurement

- (4) 固有名詞（人名、地名、テスト名など）もキーワードになり得る。なお固有名詞などのように大文字を使う必然性がある場合以外はすべて小文字で書く。

（例）Freud (Sigmund), Wechsler Adult Intelligence Scale

“キーワードの選定”

“*Psychological Abstracts*” (アメリカ心理学会) の検索にはキーワードとキーフレーズが使用される。キーワードは Gallagher, L. A. (Ed). (2004). *Thesaurus of psychological index terms*. Tenth edition. Washington, D. C.: American Psychological Association. (ISBN: 1-59147-121-4) によっている。キーフレーズはさらに論文の内容を限定したもので、“*Psychological Abstracts*” の Subject Index に使用されるものである。キーワードの選定には、これらを参考にするとよい。

第2章 論文投稿から掲載まで

この章では、投稿された論文の受稿、審査、受理、そして受理された論文が印刷、出版に至るまでの過程を簡単に説明する。

2.1 投稿資格

“心理学研究”の原著、資料ならびに“*Japanese Psychological Research*” Original Article, Short Report は、原則として本会会員の自由投稿論文の発表にあてる。論文の掲載を希望するものは、所定の体裁を整えた論文を作成し日本心理学会編集部宛てに投稿し、編集委員会の審査を受けるものとする。

2.2 投稿原稿の部数

原稿は、鮮明なものをすべて4部提出すること。ただし、論文審査の際に著者名と所属機関名を伏せる必要上、提出する4部の原稿のうち2部は表題ページに表題のみ記載し、著者名、所属名を記載しない（他の部分にも著者名がわかるような記載はしない）。

2.3 添付票

原稿には、次の諸事項を記入した添付票（用紙はA4判）を必ずつけなければならない（見本 2.1, p.45, 2.2, p.46）。

(1) 論文の種類

“心理学研究”の原著、資料の別、または“*Japanese Psychological Research*”の Original Article, Short Report の別。

(2) 表題

“心理学研究”では、表題ならびにその英訳。“*Japanese Psychological Research*”では、英文の表題ならびにその日本語訳。

(3) 欄外略題 (Running Head)

“心理学研究”の場合は、日本語で著者の姓を含め25文字（全角）分、“*Japanese Psychological Research*”の場合は略題のみでスペースを含めて50文字（半角）分。

(4) 著者名および所属機関名

著者名についてはローマ字書きを添える。所属機関名は、英訳を添え、連名の場合は各々について明記する。

(5) 連絡者および連絡先

著者（連名の場合は、その論文に関して責任をもって応答できる者）の氏名、宛先（住所を含む）、電話番号、Fax番号、e-mailを記す。氏名にはふりがなをつける。また、

添 付 票

- (1) 論文の種類： 心理学研究の原著
- (2) 表題：注意の両耳間切り換えと作動記憶
 ——事象関連脳電位による検討——
 (Interaural attention switching suppresses N400 attenuation with spoken word repetition)
- (3) 欄外略題 (Running Head)： 沖田・治部：注意切り換えと作動記憶
- (4) 著者名および所属機関：
 沖田庸嵩 (Tsunetaka Okita)
 札幌学院大学 (Sapporo Gakuin University)
 治部哲也 (Tetsuya Jibu)
 関西女子短期大学 (Kansai Women's College)
- (5) 連絡者および連絡先：
 沖田庸嵩 札幌学院大学社会情報学科
 〒069-8555 江別市文京台
 Tel: ***-***-****
 e-mail: *****@***.***.ac.jp
- Correspondence concerning this article should be sent to Tsunetaka Okita,
 Department of Social Information, Sapporo Gakuin University, Bunkyodai,
 Ebetsu 069-8555, Japan (e-mail: *****@***.***.ac.jp)
- (6) 本文の枚数： 15枚
- (7) 表： 1個, 図：3個, 付録：なし
- (8) 脚注：3個
- (9) 引用文献：16個
- (10) 英文アブストラクト：120語, 日本語訳 1枚
- (11) キーワード：attention switching, working memory, repetition effect,
 event-related potential (ERP), auditory N400
 (5項目)
- (12) 倫理チェックリスト

添 付 票

- (1) 論文の種類：“Japanese Psychological Research”のOriginal Article
- (2) 表題：Research for determinant factors and features of emotional responses of "kandoh"
(the state of being emotionally moved)
(感動の情緒的反応における規定因と特徴に関する研究)
- (3) 欄外略題 (Running Head)：Determinant factors and features of "kandoh"
- (4) 著者名および所属機関：
戸梶亜紀彦 (Akihiko Tokaji)
広島大学 (Hiroshima University)
- (5) 連絡者および連絡先：
戸梶亜紀彦 (Akihiko Tokaji)
〒730-0053 広島市中区東千田
Tel: ***-***-****
e-mail: *****@***.***.ac.jp

Correspondence concerning this article should be sent to Akihiko Tokaji,
Graduate School of Social Sciences, Department of Management Studies,
Higashi-Senda, Naka-ku, Hiroshima 730-0053, Japan
(e-mail: *****@***.***.ac.jp)
- (6) 本文の枚数： 15 枚
- (7) 表： 2 個, 図： 2 個, 付録 (Appendix)：なし
- (8) 脚注： 2 個
- (9) 引用文献： 26 個
- (10) 英文アブストラクト：120 語, 日本語訳 1 枚
- (11) キーワード：“kandoh” (the state of being emotionally moved), involvement, event-related
knowledge, contrast effect, incidental memory
(5 項目)
- (12) 倫理チェックリスト

論文の問合せ先，別刷りの請求先（Correspondence adress）についても同様に氏名，宛先（住所を含む），e-mailなどを記載する。なお，掲載時1ページ目の欄外の最初（脚注の前に）に（Correspondence adressが）示される。

- (6) 原稿本文の枚数
 - 引用文献を含め，表・図を除いた枚数
- (7) 表・図の数
- (8) 脚注の数
- (9) 引用文献の数
- (10) 英文アブストラクトの語数とその日本語訳の原稿枚数
- (11) キーワード
- (12) 倫理チェックリスト

2.4 投稿者のためのチェックリスト

手びきの巻末に記載した“投稿のためのチェックリスト”（付録3，p.60）を参照の上，誤りのないことを確認して投稿すること。

2.5 倫理チェックリスト

手びきの巻末に記載した“倫理チェックリスト”（付録4，p.61）を確認し記載したかどうか確かめること。

2.6 投稿論文の受稿

投稿原稿は，まず編集部において，この“執筆・投稿の手びき”に準拠しているか否かをチェックし，不備のない場合は受稿年月日（到着年月日）を著者（連絡者）に連絡する。それぞれの書式を逸脱したものは受稿しないので，かならず書式を確認した上で投稿すること。また，表，図で形式を逸脱したもの，判読しにくいものについても適切な変更がなされるまで受稿しない。

2.7 審査の手続きと期間

2.7.1 審査の手続き

受稿原稿は，隔月に開催される編集員会で定めた審査者2名に，著者名，所属機関名，謝辞等を伏せて送付され，審査される。この審査者の氏名は原則として公表されない。この2名の審査者の判定が一致してそのまま可となれば，編集委員会の議を経て，その旨，著者に通知される。また多少の訂正のみで可となる場合には，原稿は著者に返送され，訂正加筆が要求される。表現上の訂正が，編集委員会によってなされる場合もある。

大幅に訂正・加筆が要求される場合には，著者に原稿が返送され，期限付きで改稿が求められる。著しく改稿が遅れた（半年以上）場合には，別の論文として，新しく受稿手続きから再審査に至る。

2名の審査者とも一致して、不可と判断した場合には、編集委員会の議を経て、その旨著者に連絡し、原稿が返却される。2名の審査者間の判定が一致しない場合には、第3の審査者が追加され、審査が行われる。

2.7.2 審査の期間

受稿から審査終了まで要する期間は、論文により多少の差異はあるが、審査者には1回の審査を1か月で終了するように依頼している。しかし、審査に慎重を期することから時間の遅延があることは了承されたい。

2.7.3 論文の改稿

受稿された原稿は、審査者のコメントを付けて、改稿を求められることが一般的である。その際の注意事項を以下にあげる。

- (1) 審査者のコメントをできる限り尊重して改稿する。
- (2) 原稿の改稿部分が明確に示されている新旧対照表を添付し、編集委員会に返送する。
- (3) 審査者のコメントが著者の立場と違っていると考えられる場合は、指摘された問題点に対して十分説得し得る資料・論拠を別紙または本文中に追加することにより回答する。
- (4) 改稿もしくは受理原稿の段階でも、本文の長さ、図や表の形式に不備がある場合、編集部から、それらの点についての修正を求めることがある。
- (5) 改稿原稿の送付の際には、必ず封筒に、論文の種類（原著、資料、展望、Original, Short）と“論文番号”を明記する。

2.7.4 改稿原稿の審査

著者によって修正・改稿がなされ再提出された原稿については、時間を節約するために次の編集委員会を待たず、ただちに審査者のもとに送られる。論文によっては、再修正、再々修正、さらにはまた数次にわたる修正が求められる場合もあり得る。改稿原稿の掲載可否についての審議は、すべての審査者からの最終判定が得られた後に開かれる最初の編集委員会で行われることになっている。

以上述べた論文審査の流れを図で示すと、およそ次のようになる（見本2.3, p.50）。

2.8 二重投稿の禁止と論文の著作権

“心理学研究”および“*Japanese Psychological Research*”の誌上に掲載される論文は、すべて未発表のものであることが要求される。したがって、これらの雑誌に投稿中の論文と同じ内容の論文を、他の学術誌（紀要を含む）に投稿してはならない。

掲載される論文の著作権は日本心理学会に帰属し、両誌に掲載された論文を許可なくして複製および転載することは禁じられている。なお、著者はこれに関する同意書の提出を求められる。

2.9 論文の掲載

審査者の審査を通過した原稿は、編集委員会に審査結果が報告され、それに基づき採択が決

定される。この日をもって論文の受理年月日とし、同時にその旨が著者に連絡される。受理された論文の掲載順位は原則として受稿年月日の順によるが、編集上の都合で多少前後することもある。なお、掲載が内定した著者は、英文アブストラクトの校閲が終了した段階で、できるだけ速やかに最終原稿を印字し編集部の指定する電子媒体とともに編集部に提出する。その際、提出原稿の訂正加筆は原則としてできない。

2.10 印刷、校正と別刷

印刷所に入稿して印刷完了までおよそ3か月かかる。初校は入稿後約1か月で著者のもとに送られる。初校は著者が行い、再校以降は編集部で行う。初校は、誤字・脱字の訂正に限る。原稿以外の改訂、長文の挿入は原則として認められない。著者校正は、必ず読み合わせを行い、出来る限り速やかに原稿と共に指定の場所に送付する。初校送付の際に別刷の所要部数について問い合わせの用紙が同封される。なお別刷部数は、贈呈分の20部のみか、それを含めて、50部、100部、150部、または200部とする。

2.11 必要経費

日本心理学会会員の投稿の場合は、掲載料は必要としない。ただし、カラーページなど特別の費用を要したときは、実費を支払わねばならない。別刷代は、1部300円（2005年現在）であり、学会からの贈呈分20部の代金を差し引いた金額が請求される。またこれとは別に、審査その他の諸費用が編集手数料として、各論文一律10,000円（2005年現在）請求される。なお、著者の中に日本心理学会の会員以外の人がいる場合は、掲載料を要する場合もある。詳細は編集部に問い合わせられたい。これらの費用は変更されることがある。

以上の経費は、掲載誌発行の後で請求される。

“論文の受稿と受理”

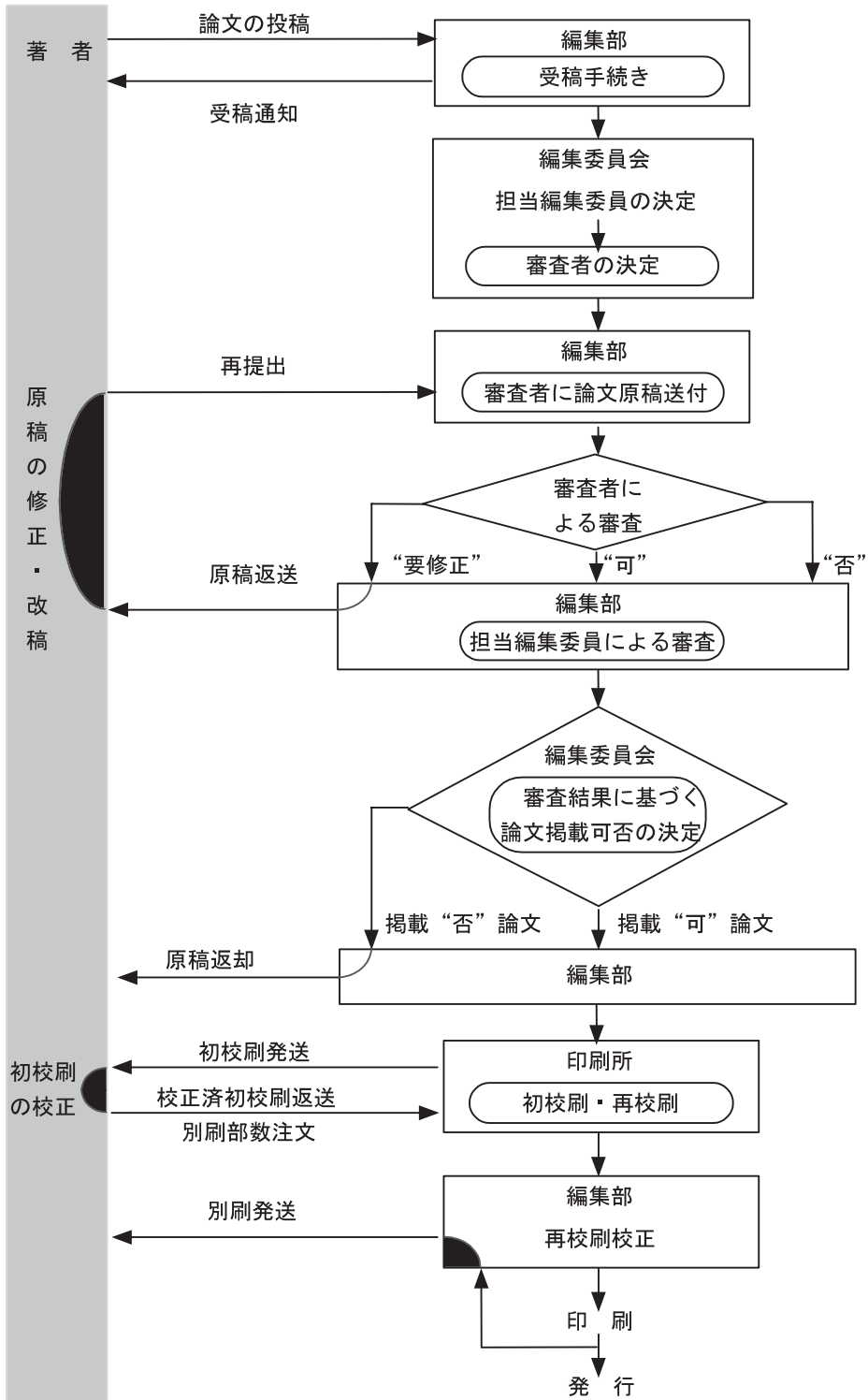
編集部から著者に連絡される論文の受稿・受理の期日は、印刷された論文の最後に記される。

たとえば、“心理学研究”と“*Japanese Psychological Research*”では、それぞれつぎのように示されている。

“心理学研究”の例：（——2003.9.5受稿，2004.3.17受理——）

“*Japanese Psychological Research*”の例：

（Received Jan. 18, 2003; Accepted Sept. 8, 2003）



見本 2.3 投稿から出版に至るまでの流れ

審査結果が“要修正”のときには、原稿は著者のもとに送られ修正・改稿が求められる。原稿の修正・改稿は必ずしも1回で終わるとは限らず、再度あるいは数次にわたる場合もありうる。

第3章 論文を書くにあたって（初心者の方へ）

自分の考えや発見などを人に伝えるために最も適した論文形式は何か。はじめて科学論文を書くにあたって、いかに構想を立て、どのようにして内容を書き進めるか、その心構えや守らなければならない規則を本章で述べる。

3.1 論文の文章と用語

論文は、広範な読者が理解しやすいように、明確簡潔な文体で書く必要がある。原則として、常用漢字・現代かなづかいを用いて原稿を作る。また英文については、専門家の責任ある校閲を経た文章であることが不可欠である。英語論文の書き方については、次のものを参照することが望まれる。

American Psychological Association. (2001). *Publication manual of the American Psychological Association*. 5th ed. Washington, D. C.: American Psychological Association.

論文中では、一般的でない用語の使用はできるだけ避ける。論文の文章のスタイルについて、とくに留意すべき点を以下にあげる。

(1) 順序よく意見を述べる

読者が理解しやすいように、用語や概念間の関連性に配慮し、論旨の展開に一貫性をもたせること。それには、句読点の付け方に注意し、誤解を招かない繋ぎ言葉（接続詞や関係代名詞）を用いること。

(2) 滑らかな表現

科学論文は、明確な論理的な文章でなければならない。自分の文章は、論理の飛躍、推論の矛盾点、時制の間違い、同意語の不用意な使用などに気付かないことがあるので、時間をおいて読み直したり、他者に読んでもらうことが望ましい。

(3) 無駄のない表現

定義の明確な用語を用いて、必要な事柄のみを記述した短い文が望ましい。一部の人々にしか分からない特殊な用語は避けること。長文になる場合は、文章の構造に注意すること。重複した表現は必要最小限にとどめ、内容のまとまりをもたせること。

(4) 箇条書き・体言止の不使用

本文中に箇条書き、体言止を用いることは、出来る限り避けるようにする。

(5) 適切な言葉遣い

話し言葉は用いない。あいまいな表現、また、何を指し示すのか分かりにくい代名詞の使用は避けること。略語を用いる際には、一般的なものを用いる。一般的な略語がない場合は日本語として無理がない略語の使用を心がける。

(6) 日本語と外国語の混在の回避

すでに定着した訳語があり、また適切な日本語で表現できるものをわざわざ外国語で記載しない。たとえば、同一論文内で、あるときは“Dim 1”と書いたり、あるときは“次元1”と書いたり、“認知者の self esteem の高低と...”などと書いたりするのは好ましくない。同じ論文の中に日本語と外国語を不統一に混在させないようにする。

(7) 正しい文法と語法

時制や叙法に注意する。主語と動詞の関係を明確にし、代名詞・関係代名詞・従属接続詞を正しく使用すること。修辞語句の挿入の仕方に気を配り、差別用語や偏見と受け取られる言葉遣いを避ける。受動態と能動態を適切に使い分ける。

3.2 論文の構成

論文の構成は、問題、方法、結果、考察、結論の各部分を含むことが望ましい。ただし、それぞれの研究の特殊事情に応じて、実際に用いられる見出しは適切なものに変えてもよい。

(1) 問題 (Introduction)

その論文で何を問題にするかを簡潔、明確に書く。ただし、“問題 (Introduction)” という見出しは印刷されない。

(2) 方法 (Method)

研究の対象、材料、方法、手続などについて、要点をもらさず詳細に書いておく必要がある。ただし、標準的方法あるいは同一方法を用いた既発表論文がある場合には、それを引用して記述を簡略にすることもできる。なお、実験参加者の氏名の秘匿、プライバシーの保護など、研究倫理に関しても記述する。

(3) 結果 (Results)

実験、観察、調査、事例研究の結果を、内容の軽重に従って事実即して忠実に述べる。自分の予期に反した事実も省略しない。

(4) 考察、結論 (Discussion, Conclusion)

得られた結果を、従来の研究成果と比較し、その理論的意義を考察し、結論に至る過程を述べる。実験、調査が複数に分かれている場合は、それぞれ方法、結果、考察を書いてもよい。ただし、その際は総合的考察が必要となる。

(5) 引用文献 (References)

本文中で引用・言及した文献を、所定の表記法にしたがって、すべて記載する (1.9,p.33)。

(6) 英文アブストラクト (Abstract)

“心理学研究” および “*Japanese Psychological Research*” のすべての論文の冒頭には、100—175語の英文アブストラクトが必要である (1.10,p.42)。

(7) キーワード (Key words)

論文の分類と検索の便のため、その論文を特徴づける英語のキーワード3—5項目が必要である (1.10, p.42)。

付録

付録 1 単位記号

1 基本単位と補助単位

Table 1

基本単位

量	単位の名称	単位記号
長さ	メートル	m
質量	キログラム	kg
時間	秒	s
電流	アンペア	A
熱力学温度	ケルビン	K
物質量	モル	mol
光度	カンデラ	cd

補助単位

量	単位の名称	単位記号
平面角	ラジアン	rad
立体角	ステラジアン	sr

2 組立単位

Table 2

固有の名称をもつ組立単位 (一部)

量	SI単位		
	名称	記号	定義
周波数	ヘルツ	Hz	s^{-1}
力	ニュートン	N	$kg \cdot m/s^2$
圧力, 応力	パスカル	Pa	N/m^2
エネルギー, 仕事, 熱量	ジュール	J	$N \cdot m$
仕事率, 工率, 動力, 電力	ワット	W	J/s
電圧, 電位	ボルト	V	W/A
静電容量	ファラド	F	C/V
電気抵抗	オーム	Ω	V/A
コンダクタンス	ジーメンズ	S	A/V
インダクタンス	ヘンリー	H	Wb/A
光束	ルーメン	lm	$cd \cdot sr$
照度	ルクス	lx	lm/m^2

3 心理学に関係あるSI単位と併用単位

Table 3
空間および時間

量	単位の名称	記号	備 考
平面角	ラジアン	rad	1°(度), 1'(分), 1"(秒) は併用できる
立体角	ステラジアン	sr	
長さ	メートル	m	
面積	平方メートル	m ²	
体積, 容量	立方メートル	m ³	1l (リットル) は併用できる
時間	秒	s	1 min (分), 1 h (時), 1 d (日) は併用できる
角速度	ラジアン毎秒	rad/s	
速度, 速さ	メートル毎秒	m/s	
加速度	メートル毎秒毎秒	m/s ²	

Table 4
周期現象および関連現象

量	単位の名称	記号	備 考
周波数, 振動数	ヘルツ	Hz	1 Hz = 1 s ⁻¹
回転速度, 回転数	回毎秒	s ⁻¹	min ⁻¹ は併用 できる

Table 5
力 学

量	単位の名称	記号	備 考
質 量	キログラム	kg	1 t (トン) は併用できる
力	ニュートン	N	1 N = 1 kg · m/s ²
圧 力	パスカル	Pa	1 Pa = 1 N/m ² 1 bar (バール) は併用できる
仕事, エネルギー	ジュール	J	1 eV (電子ボルト) は併用 できる
仕事率, 工率, 動力	ワット	W	1 W = 1 J/s

Table 6
熱

量	単位の名称	記号	備 考
熱力学温度	ケルビン	K	° はつけない
セルシウス温度	セルシウス度	℃	これも SI 単位
温度間隔, 温度差	ケルビン	K	セルシウス温度の温度間隔 ないし温度差は℃でもよい
熱・熱量	ジュール	J	カロリーは不可

Table 7
電気および磁気

量	単位の名称	記号	備 考
電 流	アンペア	A	
電荷, 電気量	クーロン	C	$1 C = 1 A \cdot s$
電位, 電位差, 電圧, 起電力	ボルト	V	$1 V = 1 W/A$
静電容量, キャパシタンス	ファラド	F	$1 F = 1 C/V$
自己インダクタンス, 相互インダクタンス	ヘンリー	H	$1 H = 1 V \cdot s/A$
磁束密度, 磁気誘導	テスラ	T	$1 T = 1 V \cdot s/m^2$
(電気) 抵抗 (直流)	オーム	Ω	$1 \Omega = 1 V/A$
(電気の) コンダクタンス (直流)	ジーメンズ	S	$1 S = 1 A/V = 1 \Omega^{-1}$

Table 8
光および関連する電磁放射

量	単位の名称	単位記号	備 考
波 長	メートル	m	\AA は併用してもよい
放射エネルギー	ジュール	J	
放 射 束	ワット	W	
放 射 強 度	ワット毎ステラジアン	W/sr	
放 射 輝 度	ワット毎ステラジアン 毎平方メートル	W/(sr \cdot m ²)	
放射発散度	ワット毎平方メートル	W/m ²	
放 射 照 度	ワット毎平方メートル	W/m ²	
光 度	カンデラ	cd	
光 束	ルーメン	lm	$1 \text{ lm} = 1 \text{ cd} \cdot \text{sr}$
光 量	ルーメン秒	lm \cdot s	
輝 度	カンデラ毎平方メートル	cd/m ²	
光束発散度	ルーメン毎平方メートル	lm/m ²	
照 度	ルクス	lx	$1 \text{ lx} = 1 \text{ lm/m}^2$

Table 9

音

量	単位の名称	単位記号	備考
周期	秒	s	
周波数, 振動数	ヘルツ	Hz	
波長	メートル	m	
密度	キログラム毎立方メートル	kg/m ³	
静圧 (瞬時) 音圧	パスカル	Pa	1 bar (バール) は併用できる
音の速さ, 音速	メートル毎秒	m/s	
音響エネルギー束, 音響パワー	ワット	W	
音の強さ	ワット毎平方メートル	W/m ²	
音響インピーダンス	パスカル秒毎立方メートル	Pa·s/m ³	

Table 10

物理化学および分子物理学

量	単位の名称	単位記号	備考
物質量	モル	mol	
モル濃度	モル毎立方メートル	mol/m ³	

4 単位につける接頭語

Table 11

基本単位

名称	記号	大きさ
ギガ (giga)	G	10 ⁹
メガ (mega)	M	10 ⁶
キロ (kilo)	k	10 ³
ヘクト (hecto)	h	10 ²
デカ (deca)	da	10
デシ (deci)	d	10 ⁻¹
センチ (centi)	c	10 ⁻²
ミリ (milli)	m	10 ⁻³
マイクロ (micro)	μ	10 ⁻⁶
ナノ (nano)	n	10 ⁻⁹

5 不適切な単位の使用例とその正しい表わし方

Table 12
単位の正しい表わし方

SIに適しない単位の例	SIに適した単位の例
μ (ミクロン)	μm (マイクロメートル)
$\text{m}\mu$ (ミリミクロン)	nm (ナノメートル)
sec (秒)	s
c/s, cps	Hz (ヘルツ)
nt (ニト)	cd/m^2
1 mL (ミリランベルト)	$3.183\text{ cd}/\text{m}^2$
1 sb (スチルブ)	$10\text{ kcd}/\text{m}^2$
$^{\circ}\text{K}$ (ケルビン)	K
1 cal (カロリー)	4.186 05 J (ジュール)
1 erg (エルグ)	$0.1\ \mu\text{J}$ (マイクロジュール)
1 dyn (ダイン)	$10\ \mu\text{N}$ (マイクロニュートン)
1 Gs (ガウス)	0.1 mT (ミリテスラ)
rpm (1分あたりの回転数)	min^{-1}

付録2 校正の記号とその意味

指示する事項	校正の方法	校正後
誤字をなおせ	日本心理学会・投稿の手ひき	日本心理学会・投稿の手びき
取って、つめよ	子供が言語習得等の過程で、どの	子供が言語習得の過程でどの
もとのままでよい	本実験で得られた結果は、全般的	本実験で得られた結果は、全般的
文字を挿入せよ	統制群と実験群の参加の平均	統制群と実験群の全参加者の平均
逆字・横字をなおせ	参加者は、次の手続で実験を受け	参加者は、次の手続で実験を受け
字を入れかえよ	実験群における遂行模倣得点は	実験群における模倣遂行得点は
明朝体になおせ	刺激語対の関連性のタイプに	刺激語対の関連性のタイプに
ゴシックになおせ	優位集団では集団規範からの	優位集団では集団規範からの
句読点、ナカグロを入れよ	同調逸脱行動の関係は集団の	同調・逸脱行動の関係は、集団の
右に移せ、左に移せ	各被験体 試行間の操作	各被験体 試行間の操作
促音、拗音を小さくせよ	形態マツチングを行なつたあと	形態マツチングを行なったあと
表ケイ（細い線）にせよ	_____	_____
裏ケイ（太い線）にせよ	_____	_____
ローマン体になおせよ	Group dynamics	Group dynamics
イタリック体になおせよ	Psychological Review	Psychological Review
ボールド体になおせよ	Psychological Research	Psychological Research
ボールドイタリック体になおせよ	Psychological Research	Psychological Research
大文字になおせよ	child development	Child Development
小文字になおせよ	Effect of Verbalization	effect of verbalization
ハイフン、ダッシュを入れよ	non-specific 80-302秒	non-specific 80-302秒
下つき、上つきにせよ	S ¹ N ² 10 ⁶ 参加者*	S ₁ N ₂ 10 ⁶ 参加者*
改行せよ	支持を与える。本研究では、……	支持を与える。 本研究では、……………

付録3 投稿のためのチェックリスト

下に挙げた緒項目は、原稿を書く時によく見落とされる事柄である。著者は、これらの点を確認した上で、原稿を編集部へ提出していただきたい。括弧の中の数字は“手びき”中の該当する箇所の一ページを表わす。

原稿の書き方

- (1) 用紙の大きさ、1ページの字数と行数、上下左右の余白の取り方は適切か。_____ p.6
- (2) 表題、英文アブストラクト、引用文献、著者名と所属、脚注、表（表ごとに説明を含め1ページ）、図の説明、図（図ごとに1ページ）はすべて適切に書かれているか。_____ p.11 - 33
- (3) 表の番号は本文中で言及される順序どおりか。図はどうか。_____ p.27 - 33

表題と要約

- (1) 表題のつけ方と字数は適切か。_____ p.13
- (2) 研究時と現時点の著者の所属が示されているか。_____ p.16
- (3) 英文アブストラクトの長さは適切か。_____ p.11

段落と見出し

- (1) 見出しの格付け、段落の区切り方は適切か。_____ p.17

略記

- (1) 不適切な略記や不必要な説明はないか。_____ p.21
- (2) 図表の中の略記に説明が付いているか。_____ p.27

測定の単位

- (1) 測定の単位とその略号は、国際単位系（SI）にしたがっているか。_____ p.22, p.54 - 58

引用文献

- (1) 引用文献の記述は正しいか。また、本文中の引用と綴りや年が合致しているか。_____ p.24, 33
- (2) 引用文献には、該当する論文の所載ページ数が記載されているか。_____ p.33

注および脚注

- (1) 著者の所属と連絡先・別刷の要求先が正しく記載されているか。_____ p.13 - 16, 44
- (2) 本文と脚注の番号が一致しているか。_____ p.16, 17

表と図

- (1) それぞれの表や図には、番号と表題が付いているか。_____ p.7, 8, 30
- (2) 表の縦線は省かれているか。_____ p.27
- (3) 図の大きさは適切か。図の各部分は縮小印刷されても判別できるか。_____ p.30
- (4) 各原図の余白に図の番号と論文の表題が書かれているか。_____ p.33
- (5) すべての表や図が、本文の中で触れられているか。_____ p.27, 30
- (6) 原稿の右横に、すべての表や図の番号が書かれているか。_____ p.27, 30

著作権と引用文

- (1) 既刊の論文・表・図を引用する場合に、書面による許可をもとめたか。_____ p.26
- (2) 引用文には、すべて出典の所載ページ数が入っているか。_____ p.26
- (3) この論文は未公開であり、他の学術誌に同時投稿していないか。_____ p.6

投稿の仕方

- (1) 原稿は必要部数を用意したか。_____ p.44
- (2) 添付票を付けたか。_____ p.8

付録4 倫理チェックリスト

【心理学研究・Japanese Psychological Research 投稿論文倫理チェックリスト】

昨今は倫理的配慮に対する要請が強まっています。このチェックリストは、投稿された論文が倫理的な要請項目をどの程度満たしているか、編集委員会が把握するために作成されました。各問いにお答えいただき、投稿論文とともにお送りください。満たされていない項目があるというだけで不採択になることはありませんが、編集委員から詳しい事情を伺う場合があります。

倫理的配慮につきましては、現在のところ以下の文献等を参考にしてください。なお、研究の実施や論文作成にあたっては、リストの項目だけでなく、全般的に倫理的配慮を欠くことのないようお願いいたします。

American Psychological Association (2001). *Publication manual of the American Psychological Association*,

5th ed. Washinton, D.C.: American Psychological Association.

(アメリカ心理学会 江藤裕之他(訳) (2004). APA論文作成マニュアル 医学書院)

日本発達心理学会(監) 古澤頼雄・斉藤こずゑ・都筑学(編) (2000). 心理学・倫理ガイドブック 有斐閣

1. 所属または関連機関に倫理委員会がある場合、研究を行うにあたりその承認を得ましたか

[該当せず ・ はい ・ いいえ]

2. 実験や調査に先立ち研究参加者からインフォームドコンセントを得ましたか (インフォームドコンセントには、実験や調査の内容についての説明や、実験や調査から自由に離脱できる旨が記されているものとします。承諾のサインを得ることが望ましいです。)

[該当せず ・ はい ・ いいえ]

3. やむを得ずインフォームドコンセントが得られない場合は、代替となる手段をとりましたか (親や責任者による承諾を得るなど)

[該当せず ・ はい ・ いいえ]

4. 実験や調査においては、参加者や動物に負荷やリスクはありませんでしたか

[該当せず ・ あった ・ なかった]

負荷やリスクがあった場合は、その内容や、どのような対処・処置を行ったか、具体的に書いてください。

[負荷やリスクの内容：]

[対処や処置：]

5. 実験や調査にデセプションがある場合、事後説明などによる対処を行いましたか

[該当せず ・ はい ・ いいえ]

6 動物実験においては、必要最小限の個体数で実験しましたか (無駄に多くの個体数を用いませんでしたか)

[該当せず ・ はい ・ いいえ]

7. プライバシーは保障されていますか (データ収集や処理、論文で紹介する際の匿名性の保障など)

[該当せず ・ はい ・ いいえ]

8. 論文は著者自身によるオリジナルの論文ですか (オリジナルの論文とは他所に投稿中でない、または公刊されていない論文を指します。データの再分析が含まれるなど密接に関連する論文がある場合はその論文も併せてお送りください。)

[はい ・ いいえ]

9. 執筆者が連名である場合、その順序は貢献度を適切に反映していますか

[該当せず ・ はい ・ いいえ]

10. 他者が作成した材料やプログラムを用いた場合、そのソースは示されていますか

[該当せず ・ はい ・ いいえ]

11. 不適切あるいは差別的な用語や表現がないかチェックしましたか

[はい ・ いいえ]

あとがき

このたび、“心理学研究”、“*Japanese Psychological Research*” 執筆・投稿の手びきを大幅に改訂することになりました。以前の改訂版が出されて14年ほどになります。この間、パーソナルコンピュータをはじめとする情報機器の発達、ならびにインターネットの全世界的普及によって知的生産のあり方もずいぶん変化してきました。今では手書きで図を描いたり、原稿用紙にペンで文章を書くことも少なくなりました。今回の改訂はこのような現状を反映させたものになっており、手書きを前提とした執筆の方法についての記述は全て削除されています。旧版の残すべきところは残しつつも、新たな執筆・投稿の際に必要な情報の簡単な概要を‘はじめに’に載せ、各項目の詳細の記載ページを示したり、従来の“執筆・投稿の仕方の概要”と第3章に記載されていた内容を、第1章に集め“原稿の作り方”としてまとめ、各項目に関連する見本や使用例も解説の近くに置くようにするといった試みもなされています。第2章“論文投稿から掲載まで”には‘投稿から出版に至るまでの流れ’を記載し、原稿の書き方と区別しています。また科学論文を書いた経験の少ない、いわば初心者のための章は最後に付けました。

もう一つの大きな変更は、倫理チェックリストへの記入を義務づけたことです。近年、研究実施や論文作成における倫理的配慮についての社会的要請が高まっていることから、投稿論文が倫理的問題をどの程度考慮しているかを把握するためです。記入がなされていない項目があるからといってただちに不採択となることはありませんが、研究テーマによっては審査結果に影響することは十分考えられます。

これら二つの改訂は、“執筆・投稿の手びき”等改訂ワーキンググループ（委員長：鈴木直人氏，委員：石井澄，釘原直樹の諸氏），ならびに倫理問題ワーキンググループ（委員長：仲真紀子氏，委員：福富護，渡辺茂の諸氏）の熱心な検討の成果です。特に前者は前委員長の海保博之氏の下で2003年1月に設立された“執筆・投稿の手びき”検討ワーキンググループ（委員長：南徹弘氏，委員：高木 修，大坊郁夫の諸氏），編集規程等見直しワーキンググループ（委員長：石田雅人氏，堀 忠雄の諸氏）での検討結果を受け継ぎ、今期のワーキンググループにおいてさらに吟味を重ねてこられました。そのおかげをもちまして、このたびの改訂版が生み出された幸いです。

本手びきは発刊に至るまでに他にも多くの方々のお世話になっております。編集委員会の席上でも委員の方々に貴重なご意見をいただきました。本手びきは基本的にはホームページ上で公開されることになっていますが、印刷される冊子の表紙のデザインは時津裕子氏に考えていただきました。また事務局の方々とりわけ鈴木厚子氏にはたいへんご苦労をおかけいたしました。この場を借りて厚くお礼を申し上げます。

2005年2月5日

社団法人日本心理学会編集委員会委員長 箱田裕司

執筆・投稿の手びき 2005年版

定価 500 円

2005年 3月 31日 発行
2006年 8月 16日 第2刷

編 集 機関誌等編集委員会
発 行 社団法人日本心理学会

〒113-0033 東京都文京区本郷5丁目23-13
田村ビル7階

電話 03-3814-3953

FAX 03-3814-3954

振替 00100-2-13338

印刷 三美印刷株式会社

© 日本心理学会 2005